菊舊和草紙 上
へ 5
1259
1

凡例

一此冊子ハ芭蕉一代の紀行なりとや其
風雅の書中にて東武の人ハ秘藏の紙
書物なきよしにて聞しき事ハ梓にまかせ
下りのくりておのれか按合なる傳ず也
おもう諸説ありして誤り花屋云々
易繁多ありけれは爰にて丸速句其句ゝ誤
待あかり古諺かかへるはよく紀行にて
枝折の書誤中ありて句意の解しがたさ
記のあれも十か七八ハ誤謬を改しつ又
再出案あれハ世の人おかしかるへきゝ
名家の句のかたちもなくぬきさり書の志くて
一此冊子ハこれまての芭蕉のいとまなきを見
書入置くのもの有様あり
一連句の中に次韻虚栗等あまた梓
行の題目有りしかとも連句の内ハ殊にて
人の姿句并ニ作者の名の出所ハ芭蕉
のもとにとゝめつ
一脱字三箇ての外いる字の誤の箇条志り入る
いらす

門 1259 1-3

一拾爲獨吟之題圖書此こ社も爲ゆ
爲べよあらハ以後人考つ
一いさゝかつ爲の書ちく後世業ともな
も他者もさうひとりこと撰集の外他
去ちまあらさあらハ以ほかの書ちく後世業
ゆ後後の拾りちれハ按の西ーしくこ
きけう物くへくー

一附録ハ四季の世ゆ後れ別ーこ
こち事林のあつめるるきの後合ーこ
ちれハ選ゆ後ちこひとくく初の他例を
ちむる者ちうもん

文化八年　赤松秋　花屋春奇淵校

東洋文庫

芭蕉袖草紙上

浪速　花屋春奇淵校

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒德頌樂天繼以酒坑
讃青醉之續信德七百五十韻

二百五十句

挾投とあくてゆ仕たい花をと
ちうさかゝ〇てのまちもあるへく

晉風文庫

鶯の見雛拉ちく　強そへて　桃青
這句以蓋子可見矣　其角
禪骨の力たりふれるさこふ　才麿
ちくく凡の松よれうしに　楊水
爰よ来て鼾をかる　紅ゝ　角
灯ゝうと俤しけん月　青

鬱雨り麻うゝ山のあるうう　水
栗よ稗さゝ黍ゑの守　丸
佗崔昼眉ば客ふよびつらん　青
蓋悲舟ゑ閑ふれくゝと　角
風のゝ倉よ彩の下ばうす　丸
先祖ばうえ知る雲の夜語　水
灯火ばらゝ幽霊を安よ友こ　角
古さかゝぐよ鬘引うけ　青
武士のみ系ば蓋よ水　水
女いなゝよゝきゝていむ　丸
孫のゝ猫の背ばる　青
ゑの猫の月ばる　角
蓋よ孫て且易訓易忘　丸
乳なゝの繋のこうつる蒼竹葉　水

春秋ばる花と倉とる暇ふば　角
白奥をゝとゝすうう併春れ安　青
寛平のおゝん俤合あり　水
清土抜灯ばて睦る　丸
はゝとゝうゝる女房れ声よて　青
血拐の紅ゝきゝ衣やゝのゝらん　角
ゑ仏来ゝむゝゝゝとてたゝゝと　丸
獄囚正ばあるいゝむ　水
天帝よ目安ばゝて寝ゝゝみ　角
抜ばゝ抜て星掛を抜　青
雨の撓る風のゝうすれ冷うに　水
秋よ対ゝて不一第堂の記　丸
白紀仁ゑ紫村よ遠い奪　青
渓の大新朝ば射る　角

師匠奥い謙め鰻い行ひ別る　丸
安房の国時に流人多を法　水
向後にて行徒の遊蕩を　角
拘れに初青の魂の竟　青
点人の徒に似るうり蒲郡　水
雨ひぐれるう夜風ゝ書　丸
夕暮い息に烟ひく思ひ　青
民屋あつて投ひせいむる　角
矣の木熱る草の世い昧く　丸
に雲かるる密蔓の古屋　水
月に人ゝ言る屋ゝ匂うれて　角
衰れとに秋躍る扶桑　青
拗恵一小祉に行とあるる　水
朔夕拗に夜めあとろく　丸

花に照る大神宮の青杉と　青
幣に巣つくる託の多る　角

次韻

雁に雲とくとくみにくとくとく

春池に人と人稲頁多と巡るあり　其角
今年は秋糸秋蕪を　戈力
月秋連に坐鳥帽子のとおりに　揚水
笹に法利秋ひりうさうや　桃青
おぼこさん川添草の系秋ーこと　丸
早山路に彷ひうせける　角
夕古める華とかやたるうれ本て　青
夜盗拗風の青秋合号に　水
雨の国にをけて敵さうさせる　角

舞殿より紫の房垂れ戸　丸
ちひやりたるい気より世代篤と　水
大きつくるこゝろ多のるるしく　青
狂さめ俺て宮の炉小根源皿　丸
あゝしたいつく帳の紙宮　角
女の気うつるとこゝろて紅すこく　青
若氣者あゝてやつれ涸る　水
ストント系入為してい命る　角
とうあえず狂ふ仕る月　丸
秋の末つゝ嫉妬世代通り　水
たゝりて
藩の院の御陵城とゝ　青
兎角人舎人い花よかるめり　丸
五世の番城寅と紙て　角
渾沌撃よ系て気小狂ゝ　青

朝吹志ゝむる廉くのゝ　水
ゝのつれ女房と髭のけるあうう　角
吉原君代ぬゝいさなゝ　丸
棒軍勇やつふせを止つて　水
ほきくすの侯ようの梓と弦引　青
富の屋代徳四とのちうゝ　丸
摩訶古生つ苦楽国と生ル　角
愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅吽　青
気と為て風ゝやうふく　水
夜の食べしく森えるほい　角
蚓のゝゝ耳と猿こい　丸
月の秋うゝゝゝの且夕て　水
ゝゝうゝむ妹う為　青
ものつて猿と新のゝゝと　丸

絵と酒のうりの奥をて酒　角
小姓うれ赤松の茶をそ　青
酒戸の神祇齋（ものいみ）――　水
煤掃之礼用於鯨之脯（くじら）　角
やとひの翁歯朶刈よ入　丸
風いとく牛さへ氷をとるよ　水
荒屋よるの粘屋をとく　青
おそるべく白骨のうめ付みる　丸
曽呂利新作漢よ扶持　角
禅小僧夏蜀よ月の詩を刻（きざむ）　青
雷盗嘶て芭蕉ゝを風　水
花の今朝訳よ羊羹切　角
橘よわゝちゝ祇ゝとゝ比丘　丸
不常ゝ息公去年の雲祇掃　水

笠祇来て宝くゝ在ゝゝん　青
田のからゝの枝よ業平（ちから）　丸
出羽嶽をおいと失ゝ　角
去のひふす人の泥棒ゝ　青
本撞のゝゝふゝゝを本所の春　水
細殿よ鬼灯の蜻蛉ゝ　角
踊仏衣の裾小川波　丸
酒の月明坊ゝの栄て　水
素流ゝゝゝゝ奥の泉ゝ　青
江岸の茶よれ竹祇ゝゝ　丸
河むゝよたゝえて泥火ゝ化　角
薬地ある根の鹿小車引止め　青
天竺ゝ園の金掘の雲　水
堤（つつみ）江の磯（いそ）等岩八角泥よ　角

青海苔うらゝい瀬琴を彈　丸
花の名所是より後伯殘賞す　水
方よ秋くゝ東金の傍　青
隣ゝ殘蕎麦よ落葉を互依　丸
夕煙全く貧居ひゝ多　角
枕の本小埠ゝ浪小邪に乘て　青
枕の清水魚蕎麦くむ　水
夏の月城伯と能ふさるよて　角
我ゆ信ハにようとうれ　丸
生活ゝ成濁折れて合臺　水
流材流て雨の夫青し　青
竹の奥下書うゝ京江雲から　丸
秋の里ゝ是あゝひ鴉　角
配所人芋の小是市城下かよて　青

あゝ色の菌辛螺を拾と　水
仏沈やむ網よ社さん生ふ魚　角
中れよ尾多花を出ゝ山元　丸
麦里れ豊の芝城芝ゝ多　水
勅使芋原の朝臣無城　青
秋城峰鳥の多城生へとし　丸
麦やきゝの世真さん　角
津の沼ゝ生田の麦の初月夜　漢
道さまたけよ食橋す　水
霜下りてよりり里の粥配り　角
寺ゝの納夏の声行ゝ清ュ　丸
ゝれゝ蚊き撞花ゝの光と活　水
固麦ゝよて小蛙の鳴し　青
膳さそ流ゝ稜の清水新ゝへ　角

成るかられよ年迄一たる　丸
牛の産れ人待下女の藤ふれて　水
歩を待人てよ服こてくよ　青
泡のゝを住人〳〵と時それい　丸
千しを成くさりあの浮木　角
業待ひてすこ誂花よ乞る可　青
如泉法師こうまこ力あり　水

次韻

世よ立て家を八秋の此中歩　丸
泳たく月ふ物ゝ行成実　揚水
あくれるも加まい業ふゝ拙て　桃青
新さひをたゝり海嵐凄く　其角
言れ客奥の客とゝるまへい　水
義後の亭れ歌を役る　丸

楽戸行て陸て風流林とゝへ　角
持よ新織をゝ色てあへを　青
嫁ゝを布女房のをいて泣成　丸
急あつれたるヨ子待よ　水
言文て接の板戸をこゝ寝寺　青
拾古く宿よゝをゝうし大　角
賛結の住ゝん屋へ遊ゝて　水
幸弘婆の男ゆゝて相る　丸
骨刀土墓踊のをゝ紅ゝり　角
疲たる馬の新ゝ張　青
内ゝ家ても心ゝきゝゝ驛張　丸
米とく屋の耳ふ蔦け紀　水
法もかひて養ゝれたく秋志もを　青
云浅屋土ゝを朝海きか　角

筆耕寸青磯の牛と花付て　水
燕系あの流くむら　森　丸
后宮れ義入車ゆくふろ　角
弥たゝゆ上の海老氣の様　青
江中かつたみて夜の宮踏慈言　丸
挑灯切て氣のうみろひ　水
風氣の角内と分城時くふ　青
入れの山ふく狼よのり　角
雷の斧下くとしてをに　水
玄又玄ゝ祇頸の函　丸
俗よい人麻呂の海の底命氏　角
加の月れ赤地赤螺　青
付城見て恰の森て義くる　丸
ひそゝくと雨義城する　水

月城草夕年の葉の月刻物　青
栗川　敷て圍ま子を城　角
嘉弱の郭いの穀ひふくと　水
氷汲紀も寄い赤のひてゐるも　角
登うふろ人いを　丸
挺とみよたくまなろしは　青
古家の注考多圍よさくるれい　丸
はたちの柔会風の荒ふろ　水
麻の氣ま生る小鮒と好変　青
かゝ拔さ城ふる生の浦抽ま　角
れたれくて清紀傳城位方ふ　水
内て森ごゞ城うけ波と　丸
豆麦の食たく祖ようの　角
人紀を待て生ゑくは　青

石白花のかたく咲にけり　丸
木もにうなで風はあ柳　水
三　霧雨霧の絵い霧の空キリ　青
驢馬の進ぶ鈴キラ〳〵　角
大根の葉ふ城の実ぶこるとう　水
雪のうしろ鮭よ文なてやる　丸
裏やよ稲の堀の腰ぶ紀　角
有倦し麻ふ姫とん引る　青
もやくと鹿入ぶこ紀　丸
通いに青の注てなくをむ　水
遥ひ一を恨う糸の目ケ掘　青
接ぶ鳥ぶ助絵ひ一られ　角
今麻有に村風とや三味線と　水
やさ一やさく紀流こなん　丸

秋の霧脇お腹切件城こ霧い　角
仕持ゆるして吹う葉の戸　青
面白く盗曲城紀ひ一に　丸
海老ちし一たる海苔の青衣　水
急湾の松う狼のこれ霧　青
裳世よひ弱ぶ雲叶ぶ神　角
卜同一蔦の蔦のきりくと　水
蛇の氣立て草の紀ひ　丸
笹原紀皇居ぶ叶城紀　角
清水の風麦と　青
いつも糸る法味ちの塔ぶ一紀　丸
老尼ぶ弱ぶの紋ありきり　水
表紀る拾ひ拾ひ遣一て　青
外霊よ麻の裾引て入　角

拓寡よ道しゝ間久い拓いら　水
葉の指よ有　水のいが　丸
俺竈よ蕎の青弦多ふる　角
ら袋さを宿に風吉を活　青
扇折る女い夏よ捨られて　丸
夫い江戸よ急わとを吸　水
むさ三歩多ふる優てやとり　青
数ふる葉のゝ不もとりて　角
抜くに未て上ろう陸る声細　水
法眼ゝ古しゝ武去絞ゝ中ん　丸
宮造ら室の道の名案して　角
夏斗弦冠の櫻よ折りけ　青
翻る葉の蘆のうるめられ沙　丸
故園今とくい蘭腥しゝ　水

風の月熱の清雪弦張る　青
美ふる小信の腰しさよ家　角
山路ちくいらちの笠と氣れ　水
隙の枝打弦張よ折ろ　丸
雲麦の插と保くゝ之の紅　青
気をうくれし人の抜ら　角
血弦滴て風古刀弦折る高巌　水
古沓ゝとて社辺よ抜し　丸
沙気て気よ抜気る芝むろ　角
孤ハ酔て醗醸よ入る　青

天和三年

歴栗

酒債尋常往處有
人生七十古来稀

詩あきんと年ゝ貧る酒債ゝ　其角

冬湖日暮て駕馬　鯉　芭蕉

干鮭を夫と宮ゝ鬼ゝ

三縁人の鬼ゝ泣しむ　角

月ハ独かうるゝ睡る膝ゝ　角

鵜の羽しるゝ教源ゝ　蕉

恥ゝ去ゝ以伝紙ゝ　蕉

時雨　山時　傘ゝ　角

無井のこてゝを置ゝ　蕉

狩場の雲と差敷ゝ　角

一の姫星の衣ゝ　蕉

新名なつとゝ歌を責ゝ　角

鴻ゝ怨の霊と帝ゝ　蕉

うゝさゝと沈むを食の疫　角

嚊ハ花貧屋ゝ　蕉

色蓮ゝ　蕉

腐ゝ　角

螺ゝ　角

奪入の近ゝ　角

たゝゝ　蕉

朝ゝ　角

黒網ゝ　蕉

枯蘆野宗塚の角ゝ　角

魔ゝ　蕉

鐵ゝ　角

庫懐ゝ　蕉

凹ゝ　角

ゝ　蕉

下司后鹿角さゝ方を実角
西瓜鹿後よ包むあやふく
長れいふ交接殊ほさ吹凋うん蕉
みちのくれ夷ちしぬ石臼角
武士の強の丸麻よくゝん蕉
八声の弱ハ雲鹿岩ゝ角
詩おさんと花鹿食う酒債れ、
美湖日くれて駕與吟猿

天和三年

虚栗

憂方知酒聖
貧始覺銭神　芭蕉

花より紀之鹿我酒ふく食ふ
眠をぼゝと陽炎の痩一晶
鶴寿て青磐夏鹿情うん嵐雪

臺子磯をまち折る唐梅其角
方鹿猶を汀の蓼と芦刈て嵐蘭
涙のさゝまよだちと知うみ華
琵琶法師ふ弱ふ一朝の時雨晶
羽ふ鳥帽子鹿ふ乗ふ紙衣蕉
涙人の意ふ鹿ふ鹿ふ苔ん雪
やゞめ一枝ふ入りひそふ死蘭
子安さゝ月一宗育鹿抱ひう角
藻い退之う肝魂を奪晶
雷鳥のそのまゝ角鹿咲うん蕉
汐ふる海ゝ　鰹ふる雪
頃塩の強鹿拾一休代う晶
羽織ふ角鹿涙を風流雄角
仇一殺く指鹿出て州の方蘭

破蕉堂て詩の上ッック　雪
胡鮮ょ西瓜を殺る遠うり　蕉
はくしきりぬ大の松浦行　掻　晶
めつらえるあけ屋くくの蔓庇　雪
蚤い私の蚤　我の　む　蘭
掃入ぬ新い六十の前ょて　角
御所ょ胡疫らく世我夷之　蕉
人の怪異徳長のなの魅さ墓　晶
私田着なき雲の　曇　雪
ちちおしや陣中に紙せ鼾うく　蘭
ムサシ野ょ飢て餓我貪る　角
盗ミ者ハ有ょ伯夷こ足洗ム　蕉
とくさい武士の　憤　叫　角
見ちゃ記題去我やくや紫掩　蘭

笑ひさんやゆ降る意　晶
噴の森云我母ょさ雨さて　雪
法ひょ蚤ん為ょ　ゆ　蕉
くれょ栖廬山の列ょ　角
掛ょ滝て瀑布我酒呑　菊

草のたんょ我い蚤ちょ人ほるれ　其角
蓑ょ我いめしくちのこれ
深川菴
蕉翁ょて盥ょ雨我丈教式
くまつし雨のこひ生我くて
生ょふるもさらにふ紙の中ょ　弘
天和四年　貞享後元
蚤雷ょ人ん中我の拉ちょ

此葉隠も花に来にけり〓〓

三聖人の図に

月花のこれやまことのあるじ達

ほとゝぎす五月ハ梅雨にさそはれ

破屋なきちいさきに風の声

そろそろ寒くなるや

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸をさす故郷

雨ふつて山かくれ雲にかくれけり

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

馬上

道のべの木槿ハ馬にくはれけり

富士川にて三つ計なる捨子の

泣ありて食ものを投てやりて

猿を聞人捨子に秋の風いかに

杜牧が早行の残夢小夜の

中山にいたりて忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

外宮御詣しけるに

よろつもするに旅の松風を

志むとるり宮て

三十日月なしちとせの杉を抱く嵐

西行谷

芋あらふ女西行ならバ歌よまん

ちりうの旧里に志ちしてや

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

当麻寺庭上の松凡

千とせもへたるならん大にして

も仏孤ひとりにて斧の音
をきゝなれさるを聞こゝて
侍蓑いく死つるけりの秋
貧性あるゝ故に一枝ざりて
孤こゝていれよ雪せよ地の寄
西上人の茅の庵のごとく異の
俗ゝ二十はゝ茅をとゝし
の侍ゝあるを今もゝしと寄あ
寒ゝしゝゝろみゝゝきよゝゝ色
後醍醐帝所伝
所朝年を記て志のふか行を志の人
不破
秋ゝ日ゝ千ゝ数も畠も不破の関

冬の日

笠ハも途の雨まゝころひ紙衣ハ
ところしの風ゝもめたり雑記
なるゝひ人我さへ老に笑ふる者
花芳の主氏ゝるなりしこゝ
ふとおりひ出て
花ゝ風の名ハ行舟ゝ解ゝる部　芭蕉
たゝ千ゝとゝしゝる笠の山茶花　野水
有明のゝ小ゝ酒をつゝゝせて　持ゝ
かゝゝゝの落ゝふゝゝふゝゝる　重五
朝鮮のほゝゝゝゝの白ひゝゝ　杜国
日のゝゝゝしふ柱ゝ茅成ゝ　正平
我庵ハ雪ゝ有ゝたゝゝて　水
餐ゝ千ゝゝる弧志の人名のほと　無

いたづらのつしと乳母寺の橋　五
さえぬ幸婚姻をもて世俗　兮
乾法のいろつき色をく火を焼て　蕉
ゆるしい実はたえ　虚家　國
田中おるこすんの柳　病るころ　兮
寄よふね常人いちんもか　水
たとえれば模の泳むる方細し　國
傳さうしよ所よりある　五
二の尼よ近情の花の咲うれく　水
撰ハむくらふとろろ皇の心　蕉
寄り物よ羞をく新おるる　五
いまそ限の矣とてふつこ　兮
ぬを人の記差のれ吹をれて　蕉
志むし宗祇の名と付　水　國

笠ぬきこ立雨も濡るく小時雨　兮
冬ふふてひとり庵　苣　水
志らしと碎けー人の骨伝　國
鳥絨ハ恵法すの國の古　五
あられさの徳もけ敷云　水
秋ふ一斗もうつくを抜そ　蕉
冠東の李白の坊よ月とうんて　五
中よ木槿をそさむ現蓋ち　兮
牛の沼と妙ゝぬこよれ久言に　蕉
其よ鮫の奥弦いくく　な　國
ちくいのり的方の星孕むく　兮
寄人い妹の眉ちきに少紀　水
結ひらく居り湯に志賀の乾漆　國
廊下い蘇のこうけつくふ　五

冬の日

[illegible]年
[illegible]を振ハを
野水

紅雲[illegible]も搗[illegible]て帰り
霜[illegible]る蕣の食　杜國
[illegible]たつる嫁の[illegible]れて　芭蕉
うつ[illegible]れと車引[illegible]　荷兮
[illegible]る[illegible]を[illegible]　重五
[illegible]打貞徳の奮　正平
雨[illegible]浅香の田探[illegible]て　國
[illegible]紀[illegible]　水
[illegible]いとこるる男　兮
[illegible]の恨のこ[illegible]し　蕉
[illegible]ちる力なし　水
[illegible]ん　五

十六

小[illegible]に盃[illegible]せ[illegible]風ひ　蕉
[illegible]れ牡丹盗人　國
縄[illegible]いやれ[illegible]て　五
[illegible]の[illegible]地[illegible]切る所　兮
[illegible]の[illegible]　國
[illegible]いの[illegible]　水
[illegible]紀[illegible]　兮
[illegible]紙[illegible]て　蕉
[illegible]掃の[illegible]　水
[illegible]ん[illegible]の[illegible]紀人　五
[illegible]　蕉
[illegible]のさて[illegible]　國
[illegible]金[illegible]ひ　五
[illegible]下[illegible]り[illegible]　兮

蓮池よ蓼の花ちるよ山吉菫　風
云よりはうゝ蔦もうゝ紙を紀　水
月よたてる唐縮の髮結られて　兮
忘もぬ浦陳　陳どかりの　蓮
秋蟬の虚よ声きく忘つゝこへ　水
蓼の実はなよ常ほゝゝ　五
鉄よう硯紙ひゝきゝ心佳に　蕉
ひゝゝ典侍の局ゝ内侍　圃
三ケの花鸚鵡尾ふりの色いさ　五
忘ゝゝもいさむ紙の掛活み　兮

冬の日

枕をゝゝ津ゝゝゝ十字
ゝゝみゝて月ゝゝ蓼に蓼ゝ　杜圃

こゝゝゝゝゝく水のいれ蓼　重五
蓮朶の蓼紙初物人の実に貧て　野水
小の市門紙れゝあけの春　芭蕉
馬糞ゝゝさに風の朴うゝ　荷兮
蓼の湯者おゝむ蒲の英　正平
ゝゝたけよ物ゝむ姫ゝつまて　五
鉄蓼ふゝゝなゝけゝゝ　圃
秀萩のゝゝゝ力を撰ゝす　蕉
蕎麦さゝ青ゝ法賀楽の坊　水
月夜双ゝゝの薮藤して　圃
紅花買ゝ屋よ時鳥きく　兮
志のゝ方のゝさゝて紙作る　水
命婦の老ゝゝ茅ゝんゝゝ　五
ゝゝきまて法の水に落れゝ　兮

佛餐にたる奥解さうり　蕉
縣ふる花見に帰と作うれて　五
五形菫ら　山　支　圃
られしまに鳴る雲雀ちりし　蕉
志賀の馬の眼と新あり　水
ふうとおや矢刺の搗のもぐ　圃
庚屋の松とうてまうれ　兮
枝しまい柴刈もケふのひつ蓑　水
梅日松さむく刀　蓑　年　五
雪の松吳の岡は笑ってし　兮
徐ら高尾ら行神谷ぐく　蕉
あさ人と指を指ようを吾はさん　五
春ふのひとくふ花ばこは禪　圃
三ケ月のひしい晴く後れても　蕉

秋湖ら行ふる琴ようて　蕉　水
高ふるとふるして鰹を敲ら　圃
声ふに金佛義とたふつる　兮
かけうをき行燒けし乾後て　水
れもひうひりも夜の第　五
こうれ花たまひ忍ぶけに今　兮
その毛れ日松我もれて　蕉

冬の日

なをとつぶにしたる燒家に
ふられと
炭壹のおのの後ろこと惹らめ　重五
ひとの筑ひを後鹿家む　荷兮
花棘馬骨の和よる笑うつ　杜國
鶴ふる出の力ふにうなう　野水

風吹ク秋の日瓶ヨ酒あたゝ日　芭蕉
萩織るかさを市に振する　羽笠
かゝる川や胡麻ヨ代ゝ苧近　兮
いとゝうの舞ひかゝりの比　五
ねりくて布搗うとゝうとゝれて　水
うこさい廿ヶ城ろ三平　圃
捨られてゝねろう寄ものとゝれる　笠
火おうぬ火焚ふき人とゝん　蕉
門ちの家ヨ紙ヨかりて寝る　五
血力うくをカのうゝきに　兮
雪ゝりて年暮の猪七つきく　圃
冬ゝの紙豆ゝくゝ　水
ゝれヨ法橋の徹とゝにける　蕉
徐ゝのいとゝ歌冬を呑　笠
白燕湯らぬ水ヨ羽ゝあゝひ　兮
宣旨かゝくゝ勅を待ろ　五
八十年ゝ三ツゝる童母ゝて　水
なゝたちゝむる七夕の酒　圃
西南ヨ桂のゝんのつゝむゝ　笠
蘭のゝゝゝゝト木ゝ青　蕉
ゝの家ヨ貧ゝる安ゝんてゝる　五
狗瓶ヨ栗ゝ洗ゝ人日の菜　兮
ゝゝきてゝてゝゝかゝゝ正月に　圃
洗ゝゝゝ白ゝ　矢業の文　水
寅の日ゝ豆を姫治の疾紀て　蕉
ゝからゝゝ南京の北　笠
いゝゝして法ゝゝの徐　兮
法ゝゝゝの浄き芹の根　五

鶏をふかうつきぬ花のかとあり　水
行衣の下ゐ結ひ入るこう哉　蕉
山の方ふくしを簾おしやりて　笠
霧ら見ぬ夏に貴ろむ雨　國
冬の日

田家眺望

雪月や鶴のイくなりぬ方へ　荷兮
冬の朔日のたれもなりけり　芭蕉
かゝ峰山家の体と木の葉ちる　重五
ふれすろ牛の捨ろ見て　社國
音もふき具足ふ方のうれし　羽笠
酌ところ童蘭切りまいて　野水
秋のころ旅の帝連歌ばれ　蕉
閑く時をて富士見る寺　兮

寂として春の花の落る音　國
糸よ糸ゆふをそひる風の香　立
雑子返よ鳥帽子の云五三十　水
庭よ木曾伝ることひの落衣　笠
おいふれ山猫よ掘足象　兮
麻ゝうゝと二の集おむ　蕉
江を迫く猟楽屋と竹紙枕て　五
我方出よ分ハかほうなる　國
たい衣苗よ落ふ紙うち挿ひ　笠
竜興めるれ木瓜の山のひ　水
背伏ゝて坐よ田を打うて　蕉
乞食の蓑伝芋ふ出のしめ　兮
泥のうゝよ尾伝引鯉を拾て　國
帝幸よ進む水のみゝをう　五

[illegible]よる年の小角豆の[illegible]　水
[illegible]原まゝ[illegible]よ[illegible]園[illegible]く　笠
けゝ[illegible]の小坊交[illegible]ま[illegible]れて　兮
れ[illegible]く蓮の実[illegible]蓮の実　蕉
静[illegible]さ小仮[illegible]のそく[illegible]れ　五
[illegible]おくきつ[illegible]風や[illegible]し　園
[illegible]物[illegible]原根ふ[illegible]れなる行屍　笠
豆腐[illegible]て母の喪[illegible]入　水
元政の[illegible]の後も破れぬし　蕉
伏見木幡の[illegible]れ[illegible]の　兮
[illegible]ひとつを拾[illegible]て　園
麦の[illegible]の雪掃[illegible]ん　五
永[illegible]秀句[illegible]　水
[illegible]の[illegible]　笠

冬の月

いゝ[illegible]と雑面牛[illegible]雲　羽笹
[illegible]れ[illegible]の松　荷谷
[illegible]に[illegible]をちやせんて　重五
[illegible]の宮[illegible]つをあ[illegible]　杜國
浪[illegible]ふん月　芭蕉
[illegible]ま[illegible]　野水

熟田三歌仙

海[illegible]れて鴨の声ほのゝ白し　芭蕉
串[illegible]あ[illegible]　鶴　胡業
二[illegible]年我[illegible]山[illegible]谷[illegible]て　東藤
[illegible]の[illegible]秋[illegible]　工山
[illegible]月[illegible]鶏の[illegible]空　乗
駕[illegible]　園の[illegible]　蕉

降雨い老うる毎の涙うと　山
一つゝん笑ー苟業の窓　藤
碁の工夫二日ともなる日と　蕉
周よ帰りうと孤ぶくれり　葉
霊芝はう沿原とるに書ぶ　藤
寒蕨元うれの入りに　山
望変て夜の破れ綴りある　葉
秋の鳥の人食より　蕉
牧ゝひの飛ぶれ淡ハ月流て　山
雪の家よ秋也遠く　藤
荒墨ゝる石の扉を押ひゝれ　葉
英人の取あひうけうふ　山
脈夷の奪ぶ沢ぶと俺て　蕉
生海亂于をふも紬八陽ゝう　藤

未の宵ゝう西小所堂の秋句　山
穀よ葛原の十はうゝん古　蕉
ほつしと蛇婦はくゝ復父人　藤
京よ名言ゝ猫の呪咀　葉
不二の根を望見てゝ沢素まゝ　蕉
森よ切雀のひゝれおらん　山
行られよ徒然志のひゝん鮫八　葉
夜うはく小性萩の戸を押　藤
月細ゝ時斗の箭八ッ子ゝて　山
振いそく消かゝの蕉　蕉
破れゝる具足城国小ゝ子ゝる　藤
高麗の縣よ畑桃りて　葉
名保の庵紙よ流れ書と頼り　蕉
ちひさき文の永を月叶伽　山

裏面の形殘最終ひまて　葉
青竹ちらはる蔦の撮折　藤

熱田三歌仙
十二月九日一井亭　芭蕉

猿蓑う一番ハ沙弓の名月哉
蓋さんせいく法の雪　一井

とやしと見紙ふる業焼て　越人
紙漉ゆえ夕時幸有ころ　昌碧
琴ひて延の上ゆ法ひり　荷兮
障子明れいきもる　竹　菱竹
起もせて夕紅ふはひ怖ル　東睡
くくれし餐の汗ぬくひ　蕉
かけられてみうらたゝれとよ　井
気と飯ゆる子の我よ似うし　人
麻布を縒ひるはゝれ織ねて　碧

蘭と取こめハ狐ぞせハ　兮
夕えのせえ字ゆる雷の音　竹
馬もあくうぬ也像の雰　睡
小雄麻のそれ炙紙油小紙付ル　蕉
発あうる往ゆ法れなり有　人
風ゆかちけて気の二ッ三ッ　兮
畠ゆはく雑ハ遠なり　碧

病床

業のひとうてもそれの拾うれ　芭蕉
中ゆ一ッ人のうれとう
ちくろひて
まと雪とうひ分を抜名付ら
年それぬ蓋ゆそ子鞋ゆ祭ら

貞享二年

山家

[illegible]舞を歯朶に絡みつき[illegible]

[illegible]賀

旅鳥古巣い掛けのかりにうら

[illegible]

[illegible]

二月堂糸花

[illegible]器のもと

[illegible]の秋風

[illegible]

柏白しさのふや鶴とぬとられ

枝葉より芽とる年二ツ　秋風

決て西方寺住口上人を送て

わつ衣を伏らんの枕に寄せよ

六はの出る夜

行とはれしに何やらはつ董州

湖を眺ること

幸路の松はの花より桜もと

蛙の小魚の茶門我名を

雪て来の花の夜うれしき

しくひまるに

いさとるに植麦ふ[illegible]

文顯和尚の[illegible]

雪てこそ角へ[illegible]

梅盛て印の[illegible]

千鳥掛　紅足亭

かきたれてさ秋よ雨の思ひあり　こ春成

麦穂ふきよるうるほひの末　紅足

一つ〳〵て蓋をる鳥ゆふられて　桐葉

うく〳〵さよ袖ぬれし名所に　叩端

復ふれて方付ほるうら付ひ　業言

そふことはうの秋の風音　自笑

楽うべて素ふ廉に尊ふさ紀　如風

会方芝弦ふ志〳〵変　安悟

通世の案に一唱ふ一置　重辰

長者の興よ脇弦ふけ山　蕉

かう掛弦義ふ下紅のうつふ　足

巻よかそよる八百の響　葉

森遠よ掛弦三つにいかをるふ　路

ふれり〳〵秋の角さの〳〵り　辰

それの秋をふるを折の梅ふ　足

猫ふ〳〵は猫雪隠れてう　風

多辺世ふ葛ふる安ふるふて　葉

行〳〵めるとち弦去情々　言

遊よ経冊付て紅ちゝり　路

亀さうつ紀を脇夏ふさ波　蕉

天幸さ〳〵勅よ遊して雲ふく　信

五月の風のこゝや雨れこゝや　風

京ふ雲も未ふられて世こ住こつ　笑

長屋のふ面ふ名恥ふひ　足

熟田三歌仙　初巻亭

何ともかしこかりしやうもなし　董竹

あさぼらけ　なて　姫ゆ　あさ　叩端

田塚ちの　ゆの　ちの　童の　うさかに　桐葉

玄家よ　有う　仏井の　中道　蕉

有ぼる　雪の　表相の　下弦　端

酒の　む　猪の　いう　仏　しき　葉

双六の　うら　み　弧　文　ま　ま　し　蕉

琴　風　と　し　む　独　ち　つ　り　香　端

鬢　下　を　侍　従　の　む　を　め　裏　て　葉

野の　宮　れ　あ　し　岐　ま　ち　の　紅　蕉

う　ら　掛　よ　ま　な　る　州　紙　く　け　流　端

藝　者　を　と　む　る　名　月　の　実　葉

面　白　の　拍　女　の　秋　の　表　を　う　や　蕉

燈　風　と　し　め　し　紅　粉　皿　端

川　瀬　ゆ　く　磐　を　角　よ　結　ま　て　葉

舎　利　ち　る　流　よ　紅　日　う　つ　ろ　ん　蕉

か　し　こ　ま　る　石　の　御　産　の　花　久　し　端

羽　織　よ　酒　城　う　つ　る　猫　尾　葉

ぶ　つ　よ　ま　て　女　よ　蜜　れ　ち　り　ま　蕉

面　白　く　扇　風　の　面　よ　洞　ん　ま　端

字　ふ　ま　し　笛　の　い　ろ　ぶ　ま　ち　り　葉

三　股　の　ふ　ね　深　川　の　拔　蕉

菴　住　ま　ひ　ま　ま　く　り　社　律　を　味　そ　端

花　曲　た　る　行　こ　ま　の　蕊　表　葉

い　ふ　ち　く　白　た　ま　ひ　を　吹　矢　を　有　あ　う　蕉

ま　緩　む　小　倍　油　ひ　や　か　に　端

有　明　て　お　拔　い　ま　を　ま　た　つ　ら　ん　葉

ま　ま　い　拔　盃　の　法　う　の　む　く　蕉

ぬり雨のふるに紀捨ける馬の背　端
ひるね覺の凡詮ふ　音　葉
蓋見白るく人い薄にさうれて　蕉
雪やもめの老そうれしよ　葉
風ふく紀六年の秋の十二月　端
門をたゝく生鯉の麥　蕉
常樂山老樂ふ融ふ玉受て　葉
寢るのうる連歌所の松　端
熱田三歌仙
此ふしと復のこれの袖にちる　桐葉
入ふり茶紀摘む藪の一家　芭蕉
雨うけ山紙子の雛をれいへ来て　叩端
清水をとらへ馬拘の方　閑水
面白さ雖四ふ孰壹る叫の上　東藤

宿のゝやけふ極る紀極る　蕉
奥紙ふ都の連ゝを付て　蕉
暮る大津に三井の鐘ふ　端
雪紀侘ふ漁の焼ふ袖をつゝ　山
蔭ふ切魚の四五百の空　葉
松風の餐ふ何紀吾侘くし　水
佛を刻む西谷の僧　藤
鳥羽玉の髪さう女愛に来て　端
急紀ふやふる朝貝の方　蕉
秋ハふ紀ゝ味ふ拘浪ひう　葉
白ふのをし夫わう音の海　山
浪ふをる緑の青ふ花極て　藤
侘ふを拾ひ朝のかつゝ迄道　端
蓋拘てかをゝに立る夜雪　蕉

五重の塔のほとりクノ菅　桂攝

鶴鶴の尾を蛇の囲に象られて　端

風まを分なおくくくへの討　乱葉

発とりて扑の庵素を引捻め　端

田舎おもりの物見こめたる　藤

うちうつく前盃の奇物つくし　揖

たとれて居と酒買まれ　蕉

狼の陣よ勅れよろ歩って　葉

おほん陣京の時弦ちへ　山

鞦韆のひろしのもれ月凄く　藤

猿もの栗の付ばまくくそ　端

蟬鳴てまと法師の秋れ　蕉

そ屋ろくくまるの尾乃琴　山

あられふる素物焼て鳴る炉に　藤

八日の蛾は星二ツ三ツ　葉

宮守ら油さけつもくくの奥　蕉

くくしの鳴を鳴くる西行　揖

同ろ

牡丹葉ふくく当る時のるるれ

庵ふうりて

夜ころもいまと乱れくつくれ

素よ様ちくるふ

秋をへて蝶もふうるやとく紫

ちて冷ひ芙てくひられて

年のくれくまて

うて夜人の数ものくく人老のれ

貞享三年

古畑や苺つゝゆく男とも

初懐紙

日の長さとゝふ雇はゆゝ扨　其角

加茂ゝ高き去年の相の實　文鱗

雪村う柳ゝゝより振さして　扶風

酒の幌よりあいの月　一齋

秋の山ゝ来のうれる愛らゝ　芳童

冥竈とれて冬ゝれてこうらゝ　杉風

星しの麦田のうふるもゝ緑　仙化

我のうるれ雨おほひせよ　李下

朝ゝこれ之時をあむ遠れへ　摩白

玄佛ゝ行ゝ伝いつくゝより　朱弦

ゝゝゝく連歌の興ゝゝゝん　蚊足

鄙よせまるむらゝの声　千里

有明の梨ゝ寸烏帽ゝ形名　芭蕉

俗世の高ゝ裏れて猶ゝ　執筆

惜まれ一者の木槿の蕊ゝ　鱗角

汝位女きゝのこうちし　齋

山ふゝみ乳とのむ猿の声悲　扶

命と甲斐の代ゝもてよ　杉

法の山我ゝ髪とゝ位ゝ五人　重

ゝゝゝ一の花ととうるその戸　下

暁日より車ゝそふるゝ乳の後　化

橋い小雨ゝを由るかけろゝ　弦

移る雲移る葉山ゝ月弥ゝ　白

ゝゝゝこれ解て様ゝとる今

敷ちゝ眠とかゝうる行ほらけ　リ

元たる屑紙かゝることぬく　蕉
けゝ咲てるさけたえもう和尚や　杓
葉ゝの風よ夕昆切りよ入　齋
かれ〳〵て下ふれけゝう孤罠　角
あゝれ月秋のくもる　傘　雛
石の擂鉢ゝの坊ふ寺すそ　曰
われ三代の力ゝ能治　下
永孫い金之〳〵れの風　化
近江の田植笑流よ聴ん　弦
とく乾て宵待よさん月　重
松よ茶の湯の浦あハれゝ　角
ニウ筑紫ゝて人の跟紙ゝ〳〵つれて　下
弥勒の堂よれもひまぬし　杓
待宵の待ハ壇たる文井中　蕉

皮ゝよ壇の拭ゝ死れ声　化
雨さへそいやゝかゝる鄙屋　齋
門ハ奥干を移除の寺　白
理不尽に拭ゝ武者宅落　重
あゝ秋く牧の所石撰ゝよ　角
鶏の一声夕日紙月ゝたゝて　雛
紙の鉢屋秋さひ紙ふて　下
いかゝ待ゝの木の葉紙死屋　白
ゝれなゝさひゝゝ壁紙義紙ゝ　杓
八あゝさゝゝう物ゝうゝれ　揚水
さゝりいさひ金山のゝ　弦
代岡の武仙紙名ある絵屋せ　角
京よ汲ゝる醒井の　水　齋
玉川やゝのく六ゝの不ゝて　蕉

江湖しよ年さのにしり　化
汗の花のうれ精まもて西るれ　重
弁うこうせい雀くよふ　水
弟むく菖蒲の畑の表をえて　不卜
歌と碁城寸盃の つ　鱗
傾俗る猶の庚系を寸合せ　択
贄よ買るく秋のうろい　蕉
麻の青城物いうぬ人はつつめ　殺
ふうれ男の　斛　をむ　有卜
笘の雨たもと七里をぬをん　下
俳句は内の冬れ川つ　水
ゑ車茶つく音いのらーして　角
梅ハさうの陵くの　雨　千春
二月の蓮菜人もをさをすや　齋

姉ゆうれ牛れおそれ日れ軟　重
胸あいぬ城の端と織ゑて　蕉
れもひうくそれ蓑の刈さし　択
菱の系城さつうらみぶせてなら　鱗
ま魚さとある山陰にーも　下
囚人城ゆうて休むる物有　齋
萩さーー出寸長うはれあひ　卜
同ーー時蟲と柔小名城付て　春
ふふうう菜世ハ煇のかう　弦
ニ変ふむよーー地くはうう青壁　化
あるーーへまこう草の岩れ　下
傾城城ゑそれぬ野の人　鱗
往よみふうーーゑれうくし　重
井ふゑ笹形よ如云ゑ　白

梅もうこ　若小日ひろり　齋
ゝ雨まるの行ふ紀清えゆ　峡水
乾とる板の仲も　辨こうに　化
伊勢城家る有小朝日の有る紀　ゝ
撰えりまして　搗　遠る　秋　下
信長の治まる代やすきうん　揚
居士と呼るゝかゝ恋の災　鱗
紅ま牡丹千里の香城ゆて　春
雲をむ谷ま生る温泉と寄　峡
岩根ふゝ童紀北家城家　角
わゝゝやこ丹の若法ゆも　齋
遠ゆ遠ゝ紀ゆ小遠ゝて　化
蓋陸城とゆ青ハ位るゝ　重
ま寄の唐山ま伽る洪ゝさま　揚
　　型

千声とあゝる　観音ゆ御名　角
松いゝゝ涼ゝふゝゝの川付ひ　択
尾長ゆゆゝる松のゝゝ　峡
麻むゝるゆ七月ゆちる雲　ト
連流ゝるゝ去ひさゝき　白
一ツ橋
花咲て七日鶴ゝる　禁ゝ　芭蕉
懐て娃のゝゝ　細　搗　清風
ゝ踊木城ゆ去ゆゝ氷る代て　華白
米ゝ外城ゝる笑の戸　曽夏
名月を隣ハ麻ゝるゝまゝ　工齋
枝ゝゝゝ相の桑城る　其角
墨衣ゝゝいむゝの売家て　風
内外の下　向ゆゝゝゝ　白

そてふる付まの使いらーに　良
一夜のちさう殘らけさる　蕉
松明る殺ひんしらへ若い　佐角
生て捨るの水よ流　るく　風
殺ゝとち紛れぬ敵を世に欲し　良
ことゝの鐘弦おり人山寺　齋
雪殺ゝ拵やさつ〳〵に家ゝて　白
江のちゝらい日も白ひのき　角
去つゝて温泉弦ゝ方ゝ　蕉
三つれ麻の一つ矢弦負う人　齋
勢〳〵と軍に寄る鈴ゝ　嵐雪
男ふう〳〵の白粉とぬる　風
絲琴に明の風弦弦ゝる　角
形ゝゝとゝ〳〵壮冊者うて　白

耳うゝく蛛ら苦ゝる花ゝさゝ　蕉
ほれ分き反法に茶ゝ弦て雪　良
札焼て刀はうゝい偽へきり　風
我ゝゝ蓼と殿の市　拳角
摘もゝち初鈴やさゝく泳ゝて　齋
糸の月夜い浦るゝん　雪
あとれく初やむ人のひゝぬに　白
眉ぬく紬の茶屋ふゝき　蕉
唐の書よゝめぬ不ゝゝ　良
ひゝり買ゝ雪の山　道齋
めゝれさい名ふ投一破れ細　風
行やゝ初く於くて塩やゝ浦　蕉
桐國の拙法ひゝんゝれと　松角
車弦ゝうて妻のやゝゝひ　白

山さくら尾ふくものさふらう
古池や蛙とびこむ水の音

三日月日記

破風口小日記やよろづをくみ　芭蕉
煮茶蠅避烟　素堂
合歓醒馬上　〃
かさふる小田の水鏡をあり　蕉
月代見金氣　堂
露繫漆玉涎　〃
張旭うねかさふる酩の中　蕉
幢と左右にとくるひ〻牛　〃
挈帚驅偷鼠　堂

ふるた都よりの弥る浦霊屋　蕉
くろ〻ぬ首かきなる拓の板　〃
乳とのひ孫よ仆と長ふ谷　〃
舟鎖風早浦　堂
鐘絶日高川　〃
新〻〻早苗の泥にとこそ　蕉
食ハすしけぬ数き大の新　〃
詫教三社本　堂
韻使五車塡　〃
花月丈山閑　〃
藤代扶けくしたのくらひす　蕉
剪銀鮎一寸　堂
箕面の滝やまと無らん　蕉
新日うけ頭の痕をかくやしろ

風殘猴早乾　丶

ふるれつる黍のあかりく秋さて　堂

内いそしんを屋の夕　有　蕉

霧離顔執與　堂

霧ノ浦目潜馬　蕉

姥くん忘てきぬ秋ふ仰ふる鳥啼　堂

ちとられぬ振の孫殺と服さし　蕉

山ノ伏山平地　堂

門ノ番門ノ小夫　丶

鷦鷯窺水鉢　蕉

ちれよくりうてゆるをやけ　堂

奥ふるれ初秋の春ふれ春ふれそ　蕉

臨谷伴蛙饗　堂

元禄中終

其餞

夕照　沾荷

情玲の望ふかしる西日哉

湖海こうふ芦の穂れく　芭蕉

雪の外の孫と屋ふりるおこそ　露沾

密よりそきうる石あの　荷

入夜のうを化粧ふる武者ふり　蕉

柴の覓よ笙をあやとる　露

山寺ハ豆ふ孤のさ侍くて　荷

花花来ヒラ中と酒造るし　蓬

中ハ雨日ノくにくる鯛の毛　露

白紀胡蝶の垣を花盛す　荷

絢孤孤探の拾よりうひて　蕉

孔主ー黎孤主ふ人さ　露

問へば紀行会の作くさ青も出て　荷

何も焼失よりれ面一くく　蕉

捧の月一つの家に伝病て　露

涙つき深一一袁の萩うみ　荷

みゝたくのおのう孫やいもめむ　蕉

四十雀てて風も多ふしめ　嵐雪

森色山の月ア多馬うう

うう雨一ひくふ陸禁のう

根かちふ者る人とて作者

成義せ一むく吟一ひむ志ハ

ら〳〵法師の名紙ちうう

仰〳〵

書よ森てすくしふ名なる月ア邦

焼のそるくく生くく

英

月とやしホすホハ雨ハ拾ふう

雨よ森て行紀うるれ　曾良

雲折〳〵人城やをむる月えふ

永中ア

四日のやサ七夜もこ三日れ月

深川八幡の牛

末賢よ宮の袋や投所中

第百五

若大くけよれものこせ人雲丸け

年の市孫香賢よ出る市れ

月雲このさけうしふ一のれ

貞享四年

風雲このおくうる西月小雪

芭蕉

[illegible]やこのすゝきふかくさかせ
[illegible]れい菊花さく酒盛りされ

光慶

牡丹よりも酒苦とる老ぬるも世
[illegible]なるなくなくなる老され
[illegible]中やものもつの沈吟をる雀

物皆自得

花よりも遊ぶ心ぞおろかなるひをぬる雀
花のもと[illegible]の上みるの法門う

[illegible]角う母五七日

卯花も母おとさ者をすきをき
[illegible]にまる如もうへすう郭ゟ　其角

嵐雪の後られて
新[illegible]下の[illegible]

名月や池をめぐりて夜もすがら

句解別

[illegible]

時い秋ゝの秋こゝろ[illegible]旅のつと　露沾
[illegible]ゝ風ゝの力　芭蕉
山陰ゝ刈田の[illegible]のふきらひて　沾蓮
武者退[illegible]平川の水　其角
暮ゝ[illegible]紀[illegible]　嵐雪
おろさぬ雲に[illegible]　[illegible]荷
傘の[illegible]　芭蕉
[illegible]山の民　露荷
[illegible]　沾荷
[illegible]たる　沾蓮

りの天に五天のむりしいたも取く　其角
製ある俗よ種撞也ゆ　露荷
意を引つ鎌倉山に興ぶし　露沾
志ある後をよ所の風葉　芭蕉
有清くなる迄ゆくことの嫌　沾蓬
害成ぬうみて雑調しる　其角
花笑て人しく手ある草の色　露荷
額板ひろ人ゆ山吹の塔　沾荷
伝法法やたらの陸の春さえて　露沾
馨うけうさに乗る帰る道　沾徳
擂の業に我文集を書終り　芭蕉
茅ゆゆるを業れさうつき　露荷
おうけい志のひ母紀な右時て　沾荷
琴成宮もる　板の　華　沾蓬

馬成下りて野後ゆ山る林村家　沾荷
九藤指さに尾上とる叶紙　露沾
風の書なゆ藤後の乗色く　沾蓬
大口笑たる意の雪　掃　芭蕉
春もれく地の弾ゆ絵ゆ春ひ　露沾
ひとう簾成編ゆしに書　沾荷
一軸の散元の連歌徳ゆ意　露荷
名成成ぬ迄紙の紙ひ　露沾
面うけて後ゆむう人男ゆ　沾蓬
みう成の用る新ゆ鶯　沾荷
雑識る元のふに元ゆ元て　芭蕉
柳のの元をこの人る春　筆
句独別
ひとゆうん参時る　濁子

薩埵の峠にて

貝ひろひ〳〵の波ふまじて　芭蕉

酸〳〵こゝ人の肩にとりつく　嵐雪

夕〳〵の笑ひいてはりしや袋哉　其角

根松苗放輝の影くて哀　蕉

沈の松こゝ路ゆめ垣ゆゝつて　子角

こゝ〳〵へ帰のゝ山ゆる尾根紙　雪

世の中紙畫のうれしら茶の洞　子

眺ゆ〳〵らの庵端中秋　蕉

花会〳〵俳のはのゝ〳〵ふ　雪

芙蓉白さく国の朝風　子

津の国のふにハしと恋責て　蕉

二夜しすりの法〳〵侍　雪

一老の連歌ゝ山ちに　子

苗代もゆら夜ゝ陸ゝ　雪

警の巣のいくつ花ゝ遠て　蕉

弥宜ゝりゝいるまのゝ月　子

句鈴別

ちゝゝねさ蛤とゆ世雲夜の撞　牧風

一羽ゝゝふ〳〵千ゝ一鐘　ゝ

枯ゝ蕊よいふしゝのみゝ　書良

田中の道の通ゝくれゝ　良々

月個ゝ己ゝ家ゝゝ馬　泥芹

秋風ゝゝ門のはゝ　水声

蕊の糸柳とゝ花と接の音　風泉

ゝよいんせゝ家のきせ鈴　夕菊

穫まゝ安ゝの清ゝて　苔翠

紙塩ゝけ紙かくれ明なの　華

白雄

時雨しぬ[illegible]うち[illegible]

大龍の葉よ[illegible]孤[illegible]

松風[illegible]れたる[illegible]孤[illegible]

胡[illegible]いくし[illegible]温泉の[illegible]

猪一つ三つよかうよあるの声

蔓の縄目もゆるされ[illegible]

縋[illegible]ともいたら[illegible]孤[illegible]

俳二うきゆ[illegible]

吉原の去境より[illegible]

恠うぬし有て俳とう

季白

邑蕉

溪石

二齋

其角

卜千

嵐雪

白

蕉

宮石

雪

其角

[illegible]

[illegible]を君[illegible]遠や[illegible]

續虚栗

十月十日鶴子會

蕉

[illegible]人と我[illegible]人[illegible]

[illegible]鶏鶏の[illegible]

[illegible]孤[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]中の秋画工[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

由之

其角

扶風

文鱗

仙化

魚児

観水

全峯

嵐雪

執筆

蕉

鰐ぶち猫ぶくとうろ早瀬川之
蕨一面よのころ 拵 抗 角
ぶきうぬ里にきゆる弧かふ切 風
有よやかうん人間陸の竜 久 鱗
蔦簾とく白ひも弧あつうく 化
れもとぬとこ弧流人 偶 偶 峰
逢中ふたてる車れ簾弧巻て 巻
仲こく弧れ弧ぶ弧ぶれしい 雑 之
花白ぶよ名のぶく浪ぶ弧れ 雪
わうるく房弧うぶ琴弧 白
須の峯きうぶ弧ぶのれ人 水
萱のぬけめれ雪弧焼 家 化
光れ文の縄ぶ人弧ぶぶうる 之
茶流ぶれしわとの実 笹 撓

里

白 雪 弧 かぶ べつ
命 弧 れ も へ 弧 よ 迫 人 蟻 角
記 出 て よ 水 ぶ ぶ ん 海 の ぶ 雪 水
新 ぶ 弧 寺 弧 ぶ の ひ ぶ 弧 弧
蕨 や ぶ ふ む 坂 の 日 に し ぶ れ 峰
小 烟 さ ひ し き 素 山 ぶ 仏 ん 風
ぶ れ 戸 の 馬 弧 酒 債 ぶ ぶ れ 蕉
ぶ ○ ぶ る 星 弧 蝉 に ぶ し ぶ 白
茫 の 志 め り 面 白 弧 ゆ し ぶ み 化
幟 ぶ さ し て 氏 の 天 王 角
郡 牧 野 の 角 吹 ふ ら し 童 声 峰
偽 ぶ る ひ し し く 腰 に ぶ た 扶 風
ぶ ん ぶ し ぶ と ぶ 家 れ ぶ 昂 を 時 て 角
課 の ま し 弧 蜀 弧 ぶ し し ぶ る 雪

[illegible]居宝[illegible]交ふん　水
代よ出て海岸すゝ山こ流　蓑
谷原き日うゝ[illegible]れ乱の木月雲　白
声きいれたるゝ[illegible]山ゝ　之

三河吉田駅

[illegible]楽てゝ城あゝ[illegible]

[illegible]

嘆[illegible]業言亭[illegible]
[illegible]君[illegible]
[illegible]

[illegible]中空や雲[illegible]　[illegible]影
[illegible]く[illegible]海の月　美言
[illegible]ひゝて　知足
[illegible]の風　加凡
[illegible]拂　安信
[illegible]なり　自笑
[illegible]鳥[illegible]　重辰
[illegible]　信
[illegible]　笑
[illegible]う　漢
[illegible]の後も一[illegible]　足
[illegible]て鄙の梅　言
[illegible]の[illegible]　蕉
[illegible]の[illegible]　風

[illegible]
楊枝をかうゝの力あらそひ　足辰
小袖ゝて紙の風をかいつくゝ　信
こゝろふく梅のゝ紙捨て　信
ゝ紀年紙ゝうて世をやこゝ　足
父のいくさを紀やゝの爰　蕉
松陰よもこゝ一ゝるの波の声　笑
翅と鳴ゝ　鶯一ゝたゝひ　言
まつゝふる恋い朝日をたゝて　信
恋ほゝたゝ物のかゝゝけ　笑
山ちゝ車ゝ削ゝ木紙ゝ　蕉
姫ふゝして岩紙寺ゝく　足
流水ゝ行鶯の朝嵐　風
孤ゝゝふく芳草ゝ　笑

屏風に書て有いむゝし紙ゝ　言
むゝし姫ゝゝころもゝ　蕉
ふゝりし梅のゝゝけゝ　辰
陳のかゝゝゝ桑紙つゝ　信
ふゝとゝゝ沼せる雨れ郭　風
ゝたをけふん鳴ゝ　足
ゝれ盛り文紙あつむゝ雲間　言
鶯枕ゝゝる神垣の梅　蕉

[illegible]
[illegible]
墨堤の雪ゝ[illegible]　[illegible]
紙ゝのゝる蕊の恨　安信
假ふのゝれゝ梅と種ゝ　白葉

[illegible]る雀はもに逢ふ　知足
[illegible]のうら[illegible]を[illegible]方[illegible]ふる　葉言
[illegible]のうれとの[illegible]迄青[illegible]風　如風
一里のたち毋[illegible]ふる[illegible]川上よ　重辰
[illegible]ふとて門[illegible]ひこ　言
市よ出て[illegible]一伝[illegible]ふ[illegible]れ　足
牛よ礼うみて[illegible]さ[illegible]つて　信
[illegible]印の[illegible]れうひさ　風
[illegible]ば[illegible]たう際貝の汐　蕉
たう細よ甲[illegible]うけて秋の風　笑
[illegible]う和[illegible]宇治の橋寺　風
[illegible]の西切谷のあられしく　足
[illegible]本[illegible]の古枝　信
[illegible]花よ[illegible]の時[illegible]　辰

[illegible]ていたりけし　足
[illegible]うらの青ふる[illegible]氷　風
角ある眉[illegible]化粧[illegible]る　蕉
[illegible]みと[illegible]の[illegible]　言
[illegible]れぬ[illegible]よ松あり[illegible]ひ　風
[illegible]て配[illegible]ようひくさまん　信
[illegible]に[illegible]ー水の[illegible]　足
式日の日[illegible]さて[illegible]せく　風
[illegible]茶の出る川、に　辰
[illegible]ー頃[illegible]ふ[illegible]ふ　蕉
[illegible]あ[illegible]　笑
[illegible]内よ外[illegible]の通　足
すし[illegible]ひく[illegible]　蕉
[illegible]の[illegible]　辰

わらはかたらはめしてこして　失言

武人の庵園多花ぞ咲ける　風

伴興蓑もれの雲ぞ　信

田をうへをあらくはこの名を問て

うれしきの外よ稚をかたく人形　華

雪の花

無田の社町時雨あるれい　芭蕉

廣重を後も清し雪の花

ふるゝ庭のさむきあらしや　梧葉

乃しいれ笠ふる風やさて

我袖に帰る山のうけろひ　蕉

秋られて有ふき器れ一ツ家

枝よ雨ひしゝ庵さひのかゝ　葉

孔をくゝ雪いぬ待を徐たるみ　蕉

こはるゝ　贅の恵を賜方　蕉

ぬるゝる猶ぬをひ枝いちりと　葉

枝重ゝ雪の後もる庵　蕉

古畑よひとり生たる麦うて　葉

枝よ人声や地ろろ人　蕉

松乃よ飯美ひい秋の風　葉

実もうゝみる長きる月　蕉

乾中寒れきめるを宵ふる　葉

温泉いるえて人もをきめる　蕉

此塚の女い恋の名にたれ　葉

たゝ法乾城咲る法ゝを　蕉

親雪にくまれて俺る雑炊声

ゆうゝ下る坂れ系つけ　葉

水酒る　里の行系ゝて　蕉

[illegible]ふきつむ新の雨除　葉
[illegible]雲紫炭[illegible]て[illegible]　蕉
物[illegible]ねる[illegible]こそ[illegible]れ　葉
[illegible]て[illegible]て經積紅を[illegible]ると　蕉
汐[illegible]を岩のうられあ[illegible]れ　葉
おもうむ松も[illegible]る[illegible]を　蕉
縣の聟のまつり目なる　葉
あき山の伏猪[illegible]声し　蕉
道一をちゆ[illegible]ち[illegible]刈[illegible]る　萱　葉
優婆塞う所[illegible]つとむる文讀て　蕉
[illegible]人記を[illegible]ぬ[illegible]きり、
[illegible]菜にぬれ[illegible]ぬ雨の音　葉
水捕のほる[illegible]牛[illegible]、
西行の辞[illegible]　蕉

美の袂よ軽うけなり　葉
伊良古崎の南の海の景[illegible]
[illegible]つ[illegible]けてうれ[illegible]　蕉
杜[illegible]
[illegible]れ[illegible]の宿
鮒ろ
[illegible]の氷ふ[illegible]れ　杜國
千鳥掛
いらこ崎[illegible]
[illegible]をきて
焼飯やいら[illegible]の[illegible]ほれ[illegible]　紅足
[illegible]し[illegible]の　源[illegible]
松をぬくか[illegible]子ヨ[illegible]て　越人
いたう鳥帽子の歌[illegible]風　足

駿るやら馬の歩みうらぬあらさ　蕉
思ふ人に後のゝ次おほろ月　人

千句

寂照庵にて蓮紙屏風に書て

荷兮

へく蔦の葉ちれはと油も絞れ

孫麻のそとそもるあこうて　芭蕉

けさの月かるる小舟に絞て　知足

御のれとうに野菊折る所　野水

千句

寂照庵より持参して

越人

蛍火やさくらに搖るも思ふれす

雲はそてるまち取をうらの松　知足

海鳥のみの鯨とはくる貝殻て　芭蕉

脊戸ちう垂に絡こつれ　恒人

寂

ゆよせん氏名月はかくかとて　足

蕎麦の貢城通を筆き　蕉

冬園扇

そもそも紙屏と知足亭ホ

討ちて　如風

ちうちうや蔦繁れとろの茅門

陽士の藜とまとる冬　梅　芭蕉

所車の志ちくとる雪搖て　安信

鶏城　枝まうつれ中の月　重夜

矢ヤの声細き藜の風　自笑

ちうちうのちく切家の篠屋　知足

家聖者のこころとかれ建て　業言

妻のふつけ〜ひとのこ吹　信

本徳機えてぬ間ふるしる　風

ちうん佛のこを目ちの法く　足

雲なびき故郷の山ぞ見ゆ　笑
故てら鐘の響こゝに見ゆ　蕉
名殘ひ藤袴ゆ冬ゆ蕭こゝて　信
蘇けし蘭の軒ゆ冬ゆ　辰
秋ゆむ月こゝに名ゆ客ゆ　足
さゝし蕭るゝ蓼のつゆ　風
荻れこゝて蓑ゆ蓑ゆ　信
渡そるゝの蓑ふつゆ　辰
柔うゝゆそゆ生る銀すゝ　蕉
山のさゝひを伝ゝむ菜つと　信
我恋ゝ峯城為さつる一ッ松　風
うゝさ名をせむるさゝ波の音　笑
ゝゝのゝを小の撓の係ふ　足
琵琶まあゝれ城楚の鈴のゝ　言

笑

色白ゝ有髪の僧のゝろも哀て　蕉
夢に似ゝる岩ゝ名ゆくみあけ　辰
抱引所代のけ老のゝれひゝ　言
ゝゝゝゝゝゝる伊勢の濱井　蕉
貝ゝゝゝゝゝる方ゝゝゝ　辰
紅屋ゝゝ名ゝ龜のゝゝ虫　信
句ゝゝて袖に拙ゝる藁ゝて　蕉
毋のいのちゝれもゝゝ　辰
羊ゝゝの嚏のあさゝゝし　笑
外山の花ゝゝゝ爰ゝさく　足
日ハ永く雨のゝゝゝ　信
厂の名ゝゝゝゝくれのゝく　言

時を十日餘名古屋ゝり歩ゝ

いらんとす

福森にて足にやけどを構

拔突板にてうつ馬扇

雪の行かしへ拔つきと恢を高馬扇

ぬる窓や孫の孫ふたく年貴暮

貞享五年元旅改元

元日森ふるとれ雪とい

一日ぬうう、せ一れ花の玉

風麦尊二百

夷立てすると九日の晩山うれ

あてくそのんい一ら次梅の景

山家ふうふ一ら人て岸のうり

ふたくものあうりてあ一ぬと

香ゑ匂へうにかる器の梅花

うれ雲やまく湯炭の一二寸

行燈の花彩大仏ら膳田

去六ゑ陽炭高一ふけく

蛙ゆそのの月遊うて

はまし一のこれのひ出す梅花

いとうて

神垣ふれもひもかけすねく傷

神垣のうちうハ梅一本も邪

ゑ氣餅のくーろれ一本うり

邪ゑ氣ゑの一すのとのうし梅花

笑ゑた次梅の中うり初さう

景清も花ゑの社ゑハ七ゑ清

・瓢竹菴

花咲石ハはーめ後や廿日往

旅立日

此経紙花に礼いふりの礼哉

いらこ崎にて契りし杜國

あまり我ために童子となりて

道の便りにもならんといふ

万菊丸と名のる肴遊のさ

かさの内に落書して

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せうぞ　檜笠

よし野にて我も見せうぞ　檜笠　万菊

丹波市

草臥て宿かるころやふちの花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

芭

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

臍峠

雲雀よりうへにやすらふ峠哉

よし野

花ざかり山は日ごろの朝ぼらけ

志ばらくは花のうへなる月夜哉

苔清水

春雨の木下につたふしづく哉

西河

ほろほろと山吹ちるか瀧の音

[illegible]

猶見たし花にあけ行神の顔

高野

父母の志きりに恋し雉子の聲

[illegible]

和歌浦

[illegible]

ひとつぬいてうしろふ夜の夜ごと

[illegible]

奈良

[illegible]

頁麿

[illegible]

時雨[illegible]

蝸牛角[illegible]

[illegible]石

[illegible]

湖水

五月雨よかれぬものやせぎ社橋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長良川賀茂氏水樓

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の月

十方昔竹素軒集ヲ　芭蕉

栗稈よとはしくもいらぬ世の友

藪の中よりうゑる青　林　長虹

秋の雨ぞ竹物こゝろ寂かけて　荷兮

なふさ湖水よりる山あひ　一井

ひたるーと人のやハひるさよ　逸人

業おろうて反根元より　胡及

木の葉ちる板のをゝも神ぞ　嵐彌

侍うぬる時の答もの　蕉

遊ぶて扨の竹声よ眠られず　虹

られよ野人寒うおとろへ　谷

ろたけを立る繁れ冷しれ　井

死てゐもおよ玉ぞるあり　人

云義のけ〜花出る夜ぞ　及

義ぬくむとて麻ひ後ち　彌

大ふうして降るとのこい行ぞ　蕉

白きたもとのえゐる輿元　井

雨乞ひをふし花のうる冷　兮

外結ふ〜ふる影の連ぞ　虹

日和さよふ人の氣おのおし　兮

不馬虫してゐも寄ひ々り　及

乞ぞきて紅つまけてかゝ多　彌

切籠ちうけ凄れ夕れ　井

さまりしの香うをを友鼓　人

人一代の意扨ふ　秋　蕉

拾ひ世いをとの恨も引むし　虹

きたふくなれと気も淡ひ　人

懐よ脇ぞさてまと恋ち　及

戸をふくめる雪の枝の亭　兮
早咲の梅を我ゆたかなり　義
嫁せぬむをめ眉かてみる　彈
志のひ言よそれられて姫れ美　及
踏ことやさせる枝のうち人　人
昭やを紀義を陽をうを振立て　兮
伊城ひなくまをやら　義
花よる現の蓋ふ拭ぬ　彈
羞ろう出をとふのクムれ　紅

ちられの有うんとられい人
送ってとうとうむ
朝ふい酒ちう志ら人　彦
送れつおろつてい木曽蛾

文科の有い二人よろこれろ　荷
撰や命ぶうむ考うう
雪られて拾い国もきうれす　越人

焼拾山
供や焼ひうう泣有の皮
ちうれやう枝の有をを

善光寺
有りけや四門四宗もたく一ツ
十六枝もやうう文科の歌ふ
吹といすふい泣方れ北台北

膳野

泣川の枝　越人
在うれも志つうたすふ公也

波志ひるゝ人世はの有　芭蕉
森たゝ陶隆窮窟ゟ霧（メテ）こん、
理をとゝゝかれたる秋のゝ雲人
甑筆の大さ五石はゝゝ、
風ゟ吹きて陶る市人　蕉
ゝゝとも長安いこれ名利の地、
遠の多さゝゝと同ゝゝはしれ人
いそゝゝと帰去の元れを出て　蕉
ひゝゝゝ世話やゝ寺の江とゝ人
武蔵古き玄蕃れ名残待へ　蕉
見ゝゝをせめるのゝけはの人
きぬゝゝゝかなゝあやゝ　蕉
風ひき絡ゝ寺のゝゝし人
ゝもつゝ屋の作ゝもゝゝ　蕉

ものいそゝゝされ和歌ゝゝ人
有と花に良の高根を小ゝて　蕉
雲花ゝゝはるゝゝの孔雀人
破ゝ戸の行ゝゝ有ゝ書ゝ、
ゝせい林ゝゝき麦の挽割　蕉
家おゝて服紗ゝゝむ十寸強人
あれゝゝひ居る神ゝのあいひ　蕉
人ゝゝていゝゝ法華の匂ひ人
初瀬ゝ義る堂のゝゝ隅　蕉
ゝゝき波嵐のゝる寺中人
恒穂のゝけ高いゝれて　蕉
おゝゝゝれ物ゝ味ゝ人
ゝのゝい推ゝ用ゝむゝ　蕉
行方ゝゝの元ゝて清ゝ人

きぬさもまとく　鶴よ居賦　蕉
秋の田ばうしせぬ素性らて　人
さいしなうく文字同じ来る　蕉
いつりしく尾底の木葉屋　人
弛たるるこの痩てかひる　蕉
花のころ侯義多もうらる　人
田ふしを食ふて腥さ口　蕉

桂暦

苔翠亭

月出い行焼酒さん産義れ　趣人
紅夕うふ紫墻のひよん　苔翠
武君と名ばつ〻弁れ家屋て　義
まり行うふのイロハるひま　反古
あうう声よ雨もつほうく義　夕菊

よもれとのそく山の苔刈　保年
ちくたく蛭のうけれ林一て　保々
女房もれい笛主ばうば　以
鮮とあううとる感れ義　古
癌おさえてあうれ紙　注　蕉
ちく止ぬ雪の戸ばて牌る　翠
さし弱たる曲舞の章　菊
秋風やる紙ばあ夕の表う　人
谷の底のいくらく石　保
ばて後まて一羽ばう　菊
仲よ転る義盛の塚　竹
庵人の紙巾に花の葉り　菊
酔ふて半ばうる義風　蕉

鹿島紀行

白菜よりそれ鶏頭にてそうしやう
紙をつかうたる稲を干したる根　越人
月雲日ほのかにおよぶ孫にして　芭蕉
笠よりもとぬをひるとろう　苔翠
ふつきうとわてそうしれ雪丹井　友五
そうの酒ふれうる帯たるねる　夕菊
御門にて高仏ゆと名をぶそれ　依々
能をそうしの渡の海苔うり　泥芹
たまもの大ふおとさうきうの人
瓦ひうふ　御れる　月　風
豆をいるふふ人を引きうして　翠
うう頁たろ名ふの員　五
香のうふ面の個るやうらん　依
小紙れ出るゆ蓋のいれの　風

俊俊の酒注ハ美夢通ふる人さう枝　人
美ーハ子の　孫ま睡まて　蕉
里をれ花のま陰ふそふ焼　五
たハう〜愁のあ〜釜ま入　菊

鄙懐紙

左柳亭　芭蕉

こやく咲け九日も近し菊の花　左柳
こ〜ろうれたけ育ての　路通
新畠ま年ぬうつ〜れ第五　文鳥
ちうう〜〜と山のつ〜形り　越人
晴吞の癖ま陰る枝明たる　如行
ふ不ふ〜〜〜〜文とれいを　荆口
笑の裏かて眠り枝をめり　此筋
年紙間ま てふを酒波うの

武人の書にんやうぬら舞　木因
けつ〻雑よ猜をとすると　残香
とろ〳〵て条こる社とのうし忠　曽良
書物の内の宏こらひ　旅　紐嶺
勉果一株もはころ悪しく　柳
歯ぬけとる主へ見も吹れを　蕉
有意く阪市ひろりてかるく　鳥
あうつ紀うる夜の分　別　口
一捧よ立つる山れ花咲て　通
恒をムひこむ素れ猿味噌　人
萬墨のとうくはりいはしく　因
材とつれかて大よ追ひ　嶺
新やくり師の及のれもしろき　筋
二代上よの醫ハふりうり　香

十二夜

本曾のやせもやさなからぬ石の肩　芭蕉

行秋や名ひきやうふこ布ふえ

所命後や酒のやうな酒五杯　水

いとゝ雪えにこうふ雪て

みそこもてまくようそ公任

本曾の谷

生ひそうひとつふるなこ　芭蕉

ほゝけいふ寒菜の　荒　伐水

代官のかさ原にその方どそ　蕉

居風に揃の編をへをきり

酢の糟茂搖を洗れうと切　水

くふも拾んてゝ次相談

親の時とやうゝ医者ぬ老花　蕉

座ぬ〳〵しのする絲ぬとゝ　水

香着れからてとまる板前　蕉

搖こゝあるあ　あたる白　粥　水

ひさ衣馬ふも長をる不丹谷　蕉

中稲の荒を公ふる風年　水

とともかもまゝに洗て有まく　松風

ほゝねてゝ玉ゝ洞のまゆけき　水

俤ら主て村公ふく寺の酒　風

てけておとれふ強き疱瘡　水

初花の汚法なき春ハ主試て　風

伊賀路のとこのれ山の裏ろ　水

紅梅集

雪やちゝ笠のひかる瓦中まて　松風

刀の柄と氷るまぬくひ　芭蕉
唐からしまかうしをかうけて　倫水
秋まてよろる渦蓋の蠅　依々
朝しい布子ぬとてとう蕎麦　曽良
所にて捨る腰の下形　蕉
島守まこと葉の礼と涙しく　倫
うくうむ麦いろの雨う　野坡
ちこうしれ指い寺の林まて　杉
髪伐切こし分を作り　倫
焼うとる物このむしろ畑まう　蕉
貫ひよせしも茶に合ぬ水　良
藪とこた涙ようれたつ霜扛　杉
出家と拘ぬ笠り上る　蕉
お局のいくるなる郷ぬ　良

取り叶の湯のさめてけり　依
こつ花ハ蓬掃ようとられて　野
塀の釣と未にくくひとの侍　扶葉
登人とあるとあ友もるとうぬれ
元禄二年
元ハ小田毎の日こと意しれ
伊達衣
陽炎の袖肩ふたつ寄まこれ　芭蕉
水和くふ考りけり　曽良
仙の屋と猫活のあえ地蛇て　答山
身いうそめと猫の腰掛　此筋
いさらへもはし名ぬにゆりう　良

そろ弦かくれ　和愛の秋　蕉

萩原に露まぬれても面白い　筋

納ふり捨ふ仏の　松明　山

五月ながら油の綿も拭あ寺　蕉

落たる髪弦と紀掃へ　良

忘れてこそ人のうもあらじ　山

ほそく書る文の優し　筋

盃弦そそぐに火燈ゝ光て　良

年寄ひとり日暮つともむる　蕉

色竹青し夏ふりをこ吹雪　嵐蘭

相のとうたつ具陸の家　山

旅車のるひろしハ月と花　良

浪ハこのすえの不二を動ゝ　蘭

客よひて汐干なるれいの鮭　蕉

卒

大よ遠ろくあちのむこる　良

城北のえつ雪晴る蓑ぬ笠て　山

記を火弦吹く篠つ紅ら手　蕉

りうこう迷ひ子ゝ見る望月夜　蘭

ふんて指ゝ甘い麻弩くろう　山

山風よさひ一ゝ落る栗のいら　良

黒木ふとこ〳〵る谷陸の小屋　北鶴

たの蛍と多を吹やるさの和尚　蕉

あゝ地の百合ゝ洞ゝけつ　蘭

狼の良こて明るふ河の月　嵐行

水の岩屋ゝ佛ゝて　山

麦畑ゝ旅坊の温泉の熱ゝ　蕉

たひ稲ゝひたる園のうち物　良

何ゆ客人の遠者と分紙ゝて　蘭

膳又居れと　朝の淚　燈　山

一門の柔ふんころ　ものさ　朝

イニてゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

孫　城つてつる　拾政の　筋　竹

未来記

草庵に拙さてゝ　ゝ　ゝ

其角　亂雪ゝ

西の　又　拙　ゝ　ゝ　ゝ　や　草　ゝ　俳

孫　又　訓　ゝ　ゝ　帳　る　の　兄　巖

野　屋　巷　の　大　縄　も　ゆ　ゝ　仍　ゝ　其角

山　の　ゝ　ゝ　ゝ　れ　後　守　ゝ　ゝ　蕉

家　下　に　有　毛　の　弱　の　ゝ　ゝ　て　雪

ゝ　ひ　ゝ　ゝ　に　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　の　雪　角

傍　輩　に　相　撲　の　折　負　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

帯　屋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全　れ　た　ゝ　ゝ　雪

孫　ゝ　ゝ　初　歩　ゝ　ゝ　ゝ　南　無　ゝ　角

幸

豆　荷　仕　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

酒　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　雪

剥　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　角

員　軍　功　者　に　ゝ　ゝ　て　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

ゝ　ゝ　ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　雪

見　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　角

菴　の　雑　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

一　通　り　彼　岸　の　花　の　咲　ゝ　ゝ　雪

日　水　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　角

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　雪

所　医　者　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

舩　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　角

提　灯　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　雪

女　屋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉

高田の宣花をもひらく　角
夏さえ寒の孫とへぬさえ　雪
たしかに知る風の石蔓へまつる　蕉
なのそれ年よせうる市中　角
江湖披露の田舎六月　雪
そのうつり扶よ有無拝縫　蕉
いたくこゆうと晴のひらん　雪
糊たるに四手打蔦のく衣　角
どんどとのひる男足牛　蕉
一夜に江戸城見さかるふ高ひ　雪
みたらし汲んて神の門前　蕉
栄へよと未来祝捷花の長　角
三人さらふ去れ月うし　雪

菓子盆に茶を人形やり計見　其角
梅の日や蝶に夜人ふりいなく　嵐雪
移風の家逆ふうる
草の戸も住くうる数を雛家
鶴家
松一本名にとあらられ於是門松　沾徳
松一本松ふ千ふ二人去見人　素堂
千ふまて
切去ものの尻夷の眼いふこと
日光山
あらうとと青葉つうと甘の去
物をてくくろ紫ふさ衣うく
郭公ふ一ふ水滝のうし聖て

雪丸け

京師聚拾亭

秋負く人を枝折の夏歩行　芭蕉

青苔夏を経て石に成ぬ　翠桃

むし暑に市のかぐ屋敷たて　曽良

町の中ゆく川音の涼　蕉

夏ものの袖なほ長し夕涼　桃

秋草絡く惟ふはたそ　良

ものゝあはれ扇なほ白し　蕉

くゝれた髪のつゝ紀条合　翅輪

尋るに火鉢焼付る家もなし　良

盗人とくれ二十六の里　桃

松の根よ爰なるべへて年とり　蕉

雪ちきりて連ぬ路　る　拙

（イニ名所の）廉起うてれ野の炭俵　瀚

猛くとるに花たちの家　良

あれたる点ゆ名にしを断れ　桃

寒くもこえん胸のくさ紀　蕉

綿蒲の時めく花の憎うし　良

松のこの羽よ爰なる蝶の華　桃

日傘さしてみる拾ふて去蓮　瀚

衣紋をてかゝ紀世打中　桃里

酒のめば谷の拾木も併て　蕉

拾人こゝへる咀の松明　良

爰武者の翌の名同艸拾　桃

（イニ）ことくと水は流のまま

森の一遍内にゆ木の行と宛　瀚

日中の絡つく紀よ多ゆ小々り　里

一登の茶紀こゝ（イニ）ちる夫婦の茎も絡うぬ　良

元禄七年芭蕉深川の草庵に

洞の地蔵ぶこもるあり　桃

苔のさふい猿の泪や落つらん　蕉

流人業刈る秋風の音　里

[illegible]　蕉

[illegible]の白浪　二寸

[illegible]　良

[illegible]　場

孫生ふれ名の海月　里

[illegible]の奥に併項未尚の

山居の位ある空撲の五尺さ

[illegible]

やしを雨なくうせいとす

えたるもしをもあれハ

木咏も菴にやふらんの草木を

るのにうの句なれて

空城撲のるひを合る敲

清水流るる柳ハ

岡一枚うゑてうゑる柳かな

白川軍

和花紙をしにて軍のくれをの　曽良

餞素堂

山伏宗祇長伴左素亭

風流の初しめやたれ田植うた　芭蕉

素堂を主に我やくけ竹　等窮

水せいて蛍の森に集らん　貫良

蛍より蜩の声出でそめぬ　蕉

一雨して角ふ蛍れま川柳　窮

月雁より屋根ふく村を秋ぞ　良

紙の女う上弦金仏に蓮を浜て　蕉

世紙たのしやとてもあ紙地　窮

或時は輝うも蛍の入り蚊ん　良

揮の小枝より蛍紙障てく　蕉

うらうてい蛍の名ふく　窮

蛍ふる山やは髪れもうけ　良

酒蛍い車紙送る蛍より来て　蕉

砂しる分と蛍ようし俗　窮

更る夜の強つき彼る麻の角　良

島の所伽の法ふせる方　蕉

いろしのいのう紙花に蛍みて　窮

かふしより紙花かふく糸花　良

ふるが屋より花く年やむう江　蕉

せう掘ろろう清水冷ろ紙　窮

蛍ひく雪舟一をちに伝有て　良

花の〳〵武士のみとのう宿　蕉

蛍ろ〳〵ぬ抱少〳〵蛍の世に会て　窮

宮より石ま〳〵うに石ふ敷し　良

より抱より細に眺をさし入て　蕉

行やう〳〵年のたらぬ七夕　窮

住うへる宿ひろ〳〵らに方紙て　良

ろ〳〵にあのらむ六条の髪　蕉

切忠ろみ抱うろ行に撫紙　窮

太山ほく天の声を三ろて　良

[illegible]しさや湯ちまつも[illegible]なく[illegible]仮　蕉

殺生石の下はしるる　窮

[illegible]を[illegible]るに[illegible]ぬ[illegible]尊[illegible]て　良

酒のはようひの醒るとる風　蕉

六十の後てこそ人の眸月かれ　窮

奉行とる家ふ油重ぬる　良

伊達衣

素門可伸ハ栗のあるけに[illegible]

[illegible]て西方浄土の後[illegible]て行基

[illegible]の一生[illegible]ふ[illegible]用ひ

[illegible]や

かくれ[illegible]や見ぬ花ぬ[illegible]の栗　[illegible]

よれるほとろ[illegible]と[illegible]る[illegible]　栗齋

切り崩を山の井の名ハ有[illegible]て　等窮

蚌[illegible]ひとろ[illegible]れ　[illegible]　曽良

六十六

[illegible]栗[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

あつさ弓矢[illegible]羽の[illegible]紙せて　素蘭

[illegible]紙讀る曉の　声　蕉

如齒朶の咲よりなほ[illegible]　齋

酒の送狼紙[illegible]ころ[illegible]し　窮

聳入に進よ[illegible]ても[illegible]つ[illegible]　良

[illegible]て送る頃[illegible]の[illegible]　雲

貧と紙神よ[illegible]もる[illegible]　竿

力のひつと紙[illegible]る　蘭

[illegible]て[illegible]魚[illegible]かねしを[illegible]る　窮

笠の[illegible]紙[illegible]る声[illegible]　柘齋

梅よりて初[illegible]や[illegible]の[illegible]　蕉

かとろる谷の[illegible]鼓をうし　良

あるかしに美絵まつりを夢　蘭
ゑ西ゐるされぬ黒髪をうえる　窮
海と離れてゐる年の哀しれ　竿
かく〳〵琴の膝やれるなき　蕉
うたく疝の美さうに紙帽子　齋
朴とかたる市の生酔　窮
行僧に三社の俳諧いく〳〵て　良
家合かてこと明こいつの後　蘭
伽ゐふる岐路の餅とまつひ　窮
四五日有城人こうろ餐の花　齋
ゐ一行てゐひおとと墨れ切る拙　雲
藤の音絃てゐ乱てゐりせぬ村　良
冠とも落とてゐりに法華れ　蕉
[illegible]文城ゐ[illegible]　窮

ゑとれい世ふうと紀人ふく文　蘭
幸もせ紀せいし悲く夜の花　齋
入りにい四門よ法の花れ山　良
法とめ紙をむる蓮生の宿　雲

志の上れ里ゐる文字物ゐこと
早苗ゐるもしとやむ悲哀
佐夜家ゐ月ゐ旧紙のもこと
保家の什おい拝す
負もを刀も五月にられ野懐
笠を出の花紀神八花あ
くてゆく〳〵てれ
笠を出いつとさつとさのゆうを
武陵の松ゐ世ゐう世迄横と

峯白う雪のおはおひいて
橋よりはいこ二本と三月こー
　　松を出
松ーやや鶴よ羽拾ふ氣ゑ　曽良
　　う鎌
五月雨のふりのこーこあ光堂　曽良
　　原前寺
卷風るの原を物もと
　　尾花沢清風亭
ちちし茶を者ってねるこ
這出よりひやうの蓑のこ
ちちを紙を貸ってあの花

卷何する人いた代のすうこうれ　曽良
　　立石
宗さや思よ思ふ入塩の声
　　新庄風流亭
あけ夏水室たつめる柳れ

雪丸け　風流
市たつひの試宿せっーやれ厨
ちーめてかとる風の墨もの　芭蕉
案低り紙よ為と折をへと　孤松
雪立かく涙牡のもとを　曽良
ちちろふる月に二千里隔ち　柳風
馬市業れと弱ひうへせん　筆
孫氣たる父ちちを父ちう伝へ　蕉

年ごろ[illegible]て判ぜさせむる　流
梅さうの三寸もやはらかなる唐瓶子　良
[illegible]紙上ケて通と　燕　如柳
三歌さうの多よ敷て思ひて　木端
清の音とさく[illegible]の墓原　風
雪ふるぬ雲いむのれ[illegible]　柳
義端　[illegible]る猪の[illegible]の　蕉
[illegible]角紙燒の小杜　松
底の[illegible]と[illegible]　鴆
[illegible]の今い底紙[illegible]　蕉
かけろ人をゆる[illegible]なれ　良
たの[illegible]と茶紙換せる[illegible]　流
呆ること悪よりなり[illegible]　鴆
油香炉[illegible]ふ[illegible]て　風

ほとんの[illegible]風ひのこの[illegible]　柳
宏信のいてふ孟ほ[illegible]と　蕉
武士ことれれいる東西の門　良
たのつうう廉もなく[illegible]　鴆
れ織よ信ひむ茸れの方　流
秋文て[illegible]ふうさん[illegible]　柳
うひ海せる[illegible]の花汲　蕉
[illegible]と年紙たつ[illegible]　風
所味の[illegible]ふ[illegible]　鴆
奉る供所の[illegible]れ紫陳て　蕉
よこれてさむき孫宜の白紙　流
ほ[illegible]の[illegible]紙[illegible]　風
[illegible]の[illegible]も雨の[illegible]　柳
[illegible]の花のひとりに油こて　鴆

ぐらひとらうぬ奴蝶番ハ宿　長

雪丸け

大和田高野平左衛門亭　芭蕉

五月雨は城のつ跡をえて早し宮上川
岩よ蛍は城つ草　抗　一栄
瓜畑いさうふ宮よ乾きて　雨良
里とむうよ大よ素の細道　川水
牛のまにこころおくさむ夕雲雀　栄
雨を重し懐の冷　蕉
俺笠は城のうちにあてく山ろし　水
松むとひふく岡の境　目良
永楽のふるひ寺は城載て　蕉
美と合をとる大鳥の低　栄
姫ぬの香は城あうつをとかたろ　良

瓜　紅うつる双六の石　水
捲上ろをくれよ児のさべて　栄
わつくふ人よ告る秋風　蕉
永劫ろ井ふれ方てを乾　水
きめくと歩くをろくを出さを　良
花の後ふ城ぬ織うをろ花遊　栄
弥をんいとふむ山陰の塔　水
稼多村い浦ぬ所の去富て　蕉
刀うをろ甲斐の一孔　良
むくく垣人も通らぬ寒ぬ心　水
をの出たひよ削ろ松ぬ木　栄
星ふろ蛍いきくうに拾ろを　良
集よ遊女の名は城むを月　蕉
素笛ふをうをたし塗ぬ弦　栄

栗賣よ出こ家路ことろ　水
合歓咲木陰を見せみちなる　蕉
たえ〳〵鳴らん蛍日は短　良
古々の変らと添ふこころ　水
云葉漏るる糸合　栄
雪ふれ作元の市の名残こそ　良
蜘蛛の日減る庭の　蕉
ふる人とたこ懐紙ふかるれ　栄
やもり鳥のまゝ〳〵相　水
年ゆくを明日は越つる夕暮　蕉
山田の種をいとまもう雨　良

花摘

元禄四日羽黒山本坊ゟ
ふのて長い

有ふるゝ雪ふかるゝ風の青　芭蕉

主

住なれし人のひとゝ夏草　呂丸
川舟の綱ゟ蛍ふ引立て　曽良
粉の乱ふと夕ふ雲　鈍雲
泥水ゟ天もうつる秋の雲　珠妙
さたも南も作ちゝ　梨水
ぬふて天屋もふ張て雪　雪
百里の旅を波ゟの半道　蕉
山ゆくゝゝ塚の記を古人　丸
斧持をくひ神木の森　良
ふうゝの法ふ志ゝひ若歌　雪
至ふゝ教の行とれく鬼　丸
古邸所ゝゝ見ふ遠ゝ　蕉
糸ゟ立枝ゟ多ふ萩　水
月ふゝ記ふれこ憑記　良

[illegible]の人うとる羅のいも　蕉
[illegible]のとろく大のかさに花ちて　丸
的場のを傍よ受ろ山吹　雪
春秋経し七つのそれ力石　蕉
汲ていたく醒井の水　丸
足袋のこしかさまても接ぐ義　円入
敵の門よ二枝藤さろり　夏
かさ術ろ麦八蛙中の地蓋ろて　丸
妻を[illegible]ろ山大の声　蕉
ろ及雪八橋のうれ[illegible]の土[illegible]く　水
温泉の香よ器ろ[illegible]体き　丸
鼈の音秋狩者小矢を刹て　雪
[illegible]かけしはろ板[illegible]れ法　入
月の山おぼの風を骨にむ　良

鍛治う火おを稲妻の紅　水
蛙うろ相よん付しんを　丸
吹子ふとろく行鞍の家　雪
盗人よ住まそふ味う者注　蕉
いのりもつをぬ冥くの祈　良
歯のさうれい流を義沼　禽堂
幕ふ上ろ乙ちの舞　水
[illegible]しさやかの三日月[illegible]
かくれぬ湯屋に[illegible]
湯屋山秋ふむ[illegible]の洞うれ　萬良

初茄集

ひつじや山城出雲の初茶　芭蕉

蟬よ車の音ばかりする井戸　重行

猪撥の春いそがしく投げて　曽良

国冬生の未のこの日　有　呂丸

我影よ冬ごもりかなしたる秋の花　行

鶏頭故郷と付しけるよ　蕉

山の端よりそそりたつ帆みな紅　丸

蕨ふき墨ぬるらし　良

栗拾ひ日毎の飯炊て　蕉

引ぬきつゝ鶏鳴るこれ戸　行

あう提灯母の泥会ふ極寒れ　良

雀よのこゑ小田の苅そめ　丸

武秋も門の板ゝ岩走り　行

赦免よとそれと指さる方　蕉

きぬしい板ふへもはし素麺　丸

宿の女は如よものこの外　良

婿入の花えろ馬にうち跨て　行

もとの廓い畑よ焼けこ　丸

金銀のまし一歩ふ改ゝ　蕉

京良の都ゝ豆腐初る　行

武雲よたゝりと迷を釜掘て　良

藤巻ふゝの化粧ゝ　蕉

遠けさい因幡法師を紅紫松　丸

変しにおくさせて　良

千日の竜巻ひとゝ小松原　行

掘牛の売と賜ふ青　丸

身い隠のゝふゝと蕎麦屋　蕉

うけて寄けさ女郎茶ゝ毎　行

明るき月は行衛の定めなし　良
温泉かそへつる陸奥の秋風　蕉
初雁のなきわたりし氷の橋　丸
山そひ他る宮の青こま　良
あま衣男にまさるこころよし　行
りかうしの花さく頃のつゝき　丸
花の時ゆとやらいふ呼ぶ名　蕉
鶯よくのうしまれむひと　良
ばつくる

出羽酒田伊東不玉亭

あたみ山や吹浦うみてる涼さ　芭蕉
海松ゆる秋なくむ帆遠　不玉
月出ハ寒屋根からん酒しちて　曾良
民の竈のけふる秋風　蕉
主

出るゝ寺堀ふやりはるを　不玉
あらもの玉ゆふるゝ義経　良
名屋他る鶏の声に冬ゝ　蕉
大城焚く新よ白髪蛍　王
海道ハ屋もふるはまて切せとゝ　良
松笠れくる武隈の土産　蕉
草枕おうゝ紀行ひて　王
ちゝうこの神よ祈るかひこと　良
礼供して南かゝこ我ゝ山ふらん　蕉
武士は未もてよゝ師ふ入　王
朝つゝえ妻帯ち後の声　良
ゝくも命と清のゝ食　蕉
ゝ花ゝ義ゝと菜蔓折　王
松ほろれ鶏の森ゝの方　良

をれいに木魂よるくさの風　蕉
をうとい蔵ふをもろこ　雅三
剉かうけつよたきたる笹ひ　良
搗おおさむる塚の蕭条　玉
そのかれいよ好き家を嵐らん　蕉
きはす夜ゆ徒くそるく　良
明月ちいん雁ゆ俳ゆ生涯て　玉
月さへ妻を陳中の市　蕉
所裏いさい葛の奥にしへ入　良
小袖袴を送る戒の師　玉
嘉良の母ふ似たると家しらて　蕉
奚にいそくぬ家いられとも　良
志良の京物つくへたる古今集　玉
花ゆ封切る坊こ酒　義　蕉

蛍の巣ゆ立をむろ羽きひ　良
蚕種動きて箒ゆ取　玉
にしゆ木ゆ作りて妨るゆ蛍さえ　蕉
こしふきを城このひ宮迄　良

雪丸け

六月十五日寺嶋彦介亭　芭蕉

そしさや海よりなる三川
月ゆ出りふゆ浪の沒海雲　令道
墨堅の船りしく屋の家ゆて　不玉
蘇ハ雨ふらんときれ　定連
撥とちけ折笠ゆて市ゆ待　晋良
新よ海こうとうあつて大　任曉
不機嫌のこころに手ゆ蛍　衣　麻風

[illegible]浦や雨よ西行うれしの花
防越や鶴往ぬまて海すし　曾良
象潟や料理何くふ神ー[illegible]ふ　低耳
海士の家や戸板を敷て寒干[illegible]

[illegible]

阿こそ[illegible]ぬ紫[illegible]
荒海や佐渡の横たふ天の川　曾良

越後路に入て

文月や六日もつねの姿なら　芭蕉
象潟の雨の夜の一句　左柳
釣舟の灯ともしつれて[illegible]
蜑の小屋の[illegible]せ上る　曾良
かりそめ寄[illegible]ふ[illegible]　眠鴎
[illegible]　此竹

[illegible]

松のるよりはく供　社　雨囊
夕[illegible]　石雪
[illegible]　筆
おもひうけぬ負[illegible]一つ　栗
[illegible]しの場　紀も[illegible]　良
[illegible]　義年
[illegible]　蕉
[illegible]　栗
[illegible]　雪
[illegible]　鳴
[illegible]の蔭　栗
[illegible]　年
[illegible]　雪
[illegible]　蕉

香ハいろしに人しの文　良

日

星今宵作る詩幸てこゝに　右雪

ちゝ寄てしゝ刈の稲　曽良

瀑水頭よりそく布ゝさて　芭蕉

はるナニ日か

拾て小枝よ花の名ぞ問し　也

雨のいろりこの日八長家あり　良

糞ぞ雪車もれし雪の上　蕉

一むら鳥人ふまて　雪

金山や作て小砂城拾ひ人　右

科のむし城跡の名とゝ　也

うれてこの面に奥の名とゝ　蕉

人いそゝうーしれ年ぞ　良

松かーい岩てしうしの音ぞ　雪

子ぞ射させる拙の家　蕉

作り者の紙ぬれ現れ　右

往昔の月ぞ同たし　也

接皮むくも老のかしらぬ　蕉

酒のまてをかれそ花半　雪

拾漢の孤村のくりを　也

後ぬれかうれ寺ーき　右

かゝふれしー地蔵の縁ぞ　曽

笈ぞおろせる里の物　雪

俗僧紙ぬつ花の言ひ　蕉

才末ぞうり内く梅のひと生　良

ひとつ家よりは女も寄つゝ萩ゝ

初秋深に入ると

うせのあはやゝ入古八寺攻海

一炎こゝの深て

掾もうこけ我後ゝ八秋の風

女紅庵　芭蕉

秋暑さうしまとゝ新秋加る

うしくさやうて秋の日の釣　一泉

なようも汐井の末ゝ三次て　左化

遠ゝくひし紀村の生垣ノ松

秋雨治の門城なうして振青　竹意

小捕の清水むこゝ入るくれ　梧子

十六

七ゝ生長せも映れなん　雲口

鳥放ヤやるにしの栗　原　乙州

涼みゝ三つ通ある絶して　如挿

ともしゝ清水を八雲に出る方　北枝

肌寒ゝ夫き寒ゝ清水　曽良

とのゝ立本ゝ月しゝ弦る稲　流志

二ッ石八ゝ紀中と緑組て　泉

ゝゝ学由る岡の後月　蕉

糸ゝて麻苧小袖ゝ衣　枝

あしたふむゝきゝ山の雫　口

ゝ月の花ゝ花ゝ花ゝ　浪生

畑ゝ月ゝ　良

あゝしゝ月八つれゝくも秋風

卯の年

歡生亭　義武

ぬまこ行人もなかるや夏萩
為うられるすすしたふく　家　享子
月又そ猟も出を松上ゲて　曽良
千ぬうとひ〳〵鉄砲ためる　北枝
松の風夏麻の蓑はいとゆめ　一蟾
雲ゝうゝへて馬の一ひれ　志格
日枕徒らる湯本の宿も西ゆる　谷ト
千戸よりもとせて辛ク酒格　麗生
紫の古ク鍔（イニ鑑村雨）もちられたり　李邑
夏の地蔵よ松ゆうそや　祝三
鶏鶏よ鳥の声もる交り　夕市
七九

欲ク鉄ゝ　ひう窄雲の松　蕉
肌の衣女のうゝ　ゆうとゆる　格
ゆゝぬをきれて我ゆう　蛆
ようゆる木ゆ出ル蛙声　枝
雷あうふ塔のふたほり　良
芋よゝをゆい井ゆ　ちゆゝ　子
加斎ゝ也る詩の胡ゝ　邑
扶もゝゝ出ふい声紛ゆ　市
ひうを為ゆ有れ市　陵ト
ゆうゆる花よ柔ゝ　生
雛うる雲遥ゝ　三
燕歌仙　蕉
馬うて煙ひけるゆ　蕉

くふ雅ささるゝ心の曲りめ　曽良
力よりと角力ふ搗落ぬれて　色蕉
鞠ゝ〻ゝとをやうてゐけり　枝
青間よ旅のあこむ水の音　良
禁刈とうた茅の笠道　蕉
霧ふるひうのゝ心ゝ菱付寺　枝
捉女ゝ五人田舎ゝさらひ　良
蔦ゝゝ恋しき思ふ忘もいて　蕉
鬢ハ剃ら絲と魚食ぬゝ　枝
蓮の糸ゝるも中し罪浮き　良
先祖の負成ゝ花ゝ門　蕉
有内の寄ゝ上ゝ　枝
寄ゝ〻ゝ桶の弓竹　良
おゝ風ハものゝぬゝ洞ゝて　蕉

公

志ゝゝ狂の浦ゝ葬れ　枝
花の香ハ古ゝ都の町造り　良
玄成のゝせる玄仍の箱　蕉
毛宋さやゝゝ〻ら新渡の鼎　枝
根の小鍋を出て片や地　良
ゝまゝゝに志ゝれのほゝ打拂ひ　蕉
笑しゝれゝのゝく霞面　枝
ゝゝ小徒蓋ゝ愛の高ゝ　蕉
非義人ふゝ人の素畠　蕉
睡ふゝゝ恋に居て淋さよ　枝
おゝれよゝゝゝ二月の孤　蕉
初霞草ゝ抜ゝ降切て　蕉
小ゝゝもちゝく伊勢神風　蕉
疱瘡の素名日永ゝ春ゝ　枝

西行法師墨をすり枇杷ついるこゝ
ほそ長たべ仙女の姿たとへん　蕉
あうねをしほる水の白波
仲強が宮治のけうとお孫の　枝
寺よ徒をたのむる口上
猪つきて拾いん花も蕨うり　蕉
酩酊人とやもん蕨刈　筆

萩の枝　路通

一泛り元うそる萩の枝、郭
むしのつひもを紙蒲団の下　菊夕
紙ふもむ夕也ふ夕蕨花て　白之
うつしにたをむ無ぬ風ふ紅　残夜
樫木原、翁木ふ新茂かくれん　芭蕉
食のそこもあ事ハおほ長　胃良
仝

肌ぬきて人ふえもる夕間ふ花　夕
咒ふ〜ぬ手時のわりれ　通
たきあのうよりに蕗　彼翠庵　良
ほそ紅ふして接茶ふひ入　木園
葦よ花もをくふくきり　夜
方元ぬりしに接の袋来　之
ふふしの貝拾ふる市ふふ　蕉
地獄絵ふく掘の長さ　通
さめしれ角目に猪と眠ん　因
淵ふ恒根ふふやむふもかけ　夜
豆腐ひく元ふふ宮ぬ鄙の花　之
冬の菓ふふ元ふ住ふ庵　蕉
花ふ〜きやふ焼り塊なくて　夕
あ〜しに元ふる宵れ月星　良

若さくり紅に染つむかしかれし夜
山ろう宮に月残雲ふまたる遥
みなとたのむたりけれかえ麻蕉
振うたひにおかひえぬる之
雲さい無野系の性して夜
家をつうう人よ絶す通
田と雲ふてわひしくもか紅葉蕉
大乳こうる森の入り口夕
ゆふ月お後絶しろにつ紅ぬて良
そろし宝ろ紅秋の岸や紅夜
谷越よ新酒春とよろろ夕
ろや辻堂のうろ紅株上ケ通
うらむれて疫病送る朔ばけ之
麦もかしけて一ぬ紅けれ侍し蕉

春ると云て近うろろ紅ぬ夕
胡蝶ろろろ の新華

一 吉田の神社うて笑笠の中
後れまれ紅ぬて

むさんやれ甲の下れさりしす

山中温泉

山中や菊ろを取湯の白
幸ろかふる紅つけて

秋の夜紅ろの業ちふる秋の風
ろる気ろろろろろ

今宵ろや雲月清ろん笠の影
ゆろしてたふれ紅ろも 秋の宗 蕉風

金昌寺

金昌寺て出るや寺ま五夜や秋もき

[illegible]

小殿うのおよ　曽良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名月や山の[illegible]

[illegible]

月へつと[illegible]しつるる海の[illegible]

如水宅興

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくれ家や月と菊とに田三反

加賀　行亭

[illegible]

千鳥橋

[illegible]

[illegible]

森よりえのる[illegible]　安信

なけ[illegible]　義

風に焼[illegible]　足

板垣のたゆ[illegible]　信

[illegible]

いせの近[illegible]

恰の二見よりつ[illegible]

[illegible]

長尾時

初時雨猿も小蓑の[illegible]

多胡碑集

いさるもはしたうん玉霞　芭蕉

打寄よ宗祇の水仙　良品

羽織の風やむ孫よ軸まれて　指月

居をゆひらむむ方の撰逐　之園

麻の声養のかり忘れ長ろ　古芽

さらく落る栗のとん栗　半蹊

雞既の空ふ丈ふ云よ折とれ　品

色の蔗ちの蝶のうろ蔗　蕉

岩ほう屋斗屋傾る蟹の蟹　園

法れ多をけよ多の法拙風

多紙志のひしし沸みて　蹊

八品

清もろうて多列さう　芳

毒の青傍岩のとりし小　蕉

方入ふる不二のつく花　風

秋う世の蔗ふるいさて　品

簫小ようの多蔽の山崔　園

屋しれい京にぬる蔗　芳

羽織そろくちの糸京　蕉

藏えて耕を肩とちやの　風

背の瓦なる頼邦の崔　蹊

手雲よまうの下れ白城出う　蕉

ちん事多し裏麻の客　品

昔性雲の率隠安法このれ　園

枝ちれこ花よ葉のこ　風

麻るはも別き い安紀俳青　芳

風雅仕上し波のそれ身子　蕉
世の中へ機嫌果る孤衾　品
！紅ゐ入れの俳一切たこ　浅
猫穢焼い月数俳しくく　風
僧の数刺る色の夕雲　園
おくるゑしなるゑくと踏変て　蕉
老うくまし時よ細しる　風
生れ来て煙草のすぬる乳楽　品
志し繁ゑうらに和ようる　芳
左義長のうらもさうそを待　残
ゑうるく雪よ及とる　菫園

金屏の松のたひやをるり
ゑしうて

初雪やいつ大佛の付うる　蕉
猪酒堂
浪花津戸四ゑ山れゑさゑ　芳
ゑしうれゑる人成
ゑくさゑて
生いたく梅とんのそこまり
蕉柿舎こ
七書こう墓もゑるう鉢こ記
筆末世ゑ似てもこもん鉢呼　蕉
行ゑこれ行をの市にゆく島
元禄之年
萬代ゑこ行人いゆうをゑのち
芝をぬきう
浪華のたくものゆて蕉花

時雨て花やとおる梅笠　園女

こえの景色ねこうて

うとめうれうしほれ花も濡雲

俳諧集

太神宮法楽

伝の木の花ともちらしたまうれ　文盛

声よ朝日成合むらひす　孟光

まちふる紅葉の搗き雲これて　又玄

二系の菫所幸行ゆり　雲菴

有明の手紙を行よりつゝみ　勝延

廉をとゝろ紅のあつ夫　清里

釣り掛よ嵐のむふ寄すて　光

門細めゆる田の中れ寺　蕉

山路来て清れまれる油の汗　蕉

物ゝ寄成たのひ悲しきを　玄

女のゝ古紅御鏡の破ゝされ　蕉

甚よ付つきて洞義しつ　延

いねうてに酒さくもるゝ鳥　野人

陳のもり屋よ傍のうりこ　光

ちゝちにのほまと石を敷ひ　里

はしめてはるる岡の初稲　菴

濡る方成紛ら機織る家ゝ　玄

藍のしみつく搗くゝ人　蕉

神役よ雇を来ぬる須連時　光

返ふ法ゝるゝ鳥めの　人

意ゝと沈の山やめ成ゝ　延

水鶏を追よ紀ゝ　曉　玄

[illegible]　　菴里
[illegible]　　蕉
[illegible]　　光
[illegible]　　玄
[illegible]　　延
[illegible]　　人
[illegible]　　菴
[illegible]　　光
[illegible]　　蕉
[illegible]　　正木
[illegible]　　玄
[illegible]　　延
[illegible]　　人

一幅半

紙衣のぬるるもわるしむれば　芭蕉

[illegible]　　乙孝
[illegible]　　一有
[illegible]　　杜國
[illegible]　　應字
[illegible]　　葛森

○付来芭蕉翁の句ぶみにけり

稲妻のひろてまれいを投て

蛙中のとうをに行徒ともく　蕉

[illegible]へ[illegible]ゆるとかるゝ人

命をとゝくゝの速歌を懐ゆ

汐八手てゆる文さく須磨の浦

白雪に留る袁城の日て、
乞食等らる橘のあれ中
聖しくと丸雲かりれ尽もつ
屋敷の井しくけ〜紀こ伝詩が俳り
八つふるるの新酒けれり

湯を中柴垣の系れ子等
花垣の底いそのくなるの
やへさくらの初さつけた
ゆるとひひ佐うさめれ
一夏ハこれ花ものの孫うや

去来

おくひハあれこえつ花さうり
ものの雀の中の柏やけの声
忙うよとさけいれとろをれ声
名丸をさひいるむ
高山よりたハれい塚のすこれま

こ白成

已の実
種芋や花のさうの成責あるく
火燒ふさけハ風うくるあり　半残
酒好のかーらくと結ハ花ものれて　土芳
数花くうさ花華の衣　長京
有明の七つ紀ある茶院る　残
ひさこの札と附ろくり　蕉
ひを風よ桂の底ちる掾へて　品

小倉の舞子にて　芳
やをしど矢洲の汐干の月淀　蕉
多賀の杉子もいのちのとろる　殘
子拾のとゝとも打そゝ三輪組　芳
人々ようにく葵名にをし　品
萱州のゑもかいつぬ色とて　殘
秋たゝり蟬の啼死ふ夕　蕉
月くまて石屋根まる風の音　品
こゆまて青紀藍瓶の家　芳
ほさうゆの花れ傳は咲ちて　蕉
猿の口来るゆのうつり色　殘
猫れ眼の六ッ桂(ナキサキ)接に四ッ角ク　芳
あをのをゝひの鐵蘿蔔と切　品
からゝとも病人あれい備さぬ　殘

たゝ〳〵やいて出る髪結ひ　蕉
ちり〳〵に俳屋の形紙反ち　品
冬至の妻ゑ拭思ひま次　芳
化粧ゝもよそ〳〵も思ふ子　蕉
まゝこえ猿のにゝとるうり々　殘
朝々ゑ〳〵ひの子々暗まつ　芳
いとあいれかる蚋く京れ流　品
田鼠の稲倉ひあ〳〵方流て　殘
風ひえそむる年の子れ接　蕉
蕗〳〵これ紙のゝ紀ちゝ徒もゝ　品
死ナゝゝい人の付ゑ来る〳〵き　芳
秋風や吹起ゝれてかい元ぬ　蕉
筆紙蔵せいゝ鳥ゆ出す　殘
ちりしとひと一の花ゑ指ひ　芳

[illegible]家よ屋の大戦うちうち　品
入さこ

花見　芭蕉

木れをとふ付も鶯もけくしかな

西日のとこのふ小紙天[illegible]し　珠碩

強人の風うれりを[illegible]て　曲水

くれもあ〳〵ハぬをの鞘　蕉

月やうて假の内裏の同石　碩

数日はくろ拙うを[illegible]　水

鞍垂るこ茶駒よ秋の末て　蕉

名ハさ多〳〵に活り暮る雨　碩

入り迄よ活の涌湯ゆ多る暮　水

中うもせいの言れと伏　蕉

うるる城産一方[illegible]り　碩

月うれ筋より急ぎのうて　水

物れもよ多ふ拘淦てせられて　蕉

月えるる兵の純おもこ多　碩

秋風の紅とこハるふこれ青　水

下りうこやの白よ若松　蕉

千紙よむ花の寄りの一分田　碩

巡礼死ぬる通ぬけうよ　水

行ようも様ぬうてをいる　蕉

みかくはとの力こふき　碩

羅よ月城いとるる、帰れ　水

然雑ううれと活ぬう　蕉

手来弓紀の実ちう頭よ　碩

酒てうけうるいうぬうん　水

双六の月とのうくまて言かう　蕉

かくの打佛よむりゝ長仏　碩
中しに古間小屋れい雲もふ　水
我名ハ星のふくゆふうものゝ　蘆
ふくゆれていくゝぬ鶴の肝と爽　碩
月抜しこゝ吹ふくる　水
花をゝれたゆゝ拓ゝ拓て　蘆
ゝく四方なるまゝ屋の家　碩
一夏の待むつゝと五月雨　水
遠老の茶いい飲ぬふる　蕉
ゝれ咲ハ芳野ゝうゝ紙衣　水
枕よゝふくゝ長ゝ山中　碩

螢見

本ゝるゝや紙ゝ酸ゝて芝ゝ

雲の抜手ゝも流ゝ雲ゝ　凡兆
幻住庵ゝ入て
ゝえたのむ椎ゝ本あり夏木立
ゝゝゝ山ゝ背中ゝゝゝふゝく　曲翠
雲ゝゝ雲ゝの上も苔の秀　乙州
ゝゝも猶ゝつゝ瓦の花
猶ゝゝゆくゝくゝ
椎のゝゝゝゝて来ゝ御田植
くゝゝの泣ゝゝゝゝ夏の山　野水
海ゝゝ五月雨ゝゝゝゝゝ一ゝゝ　凡兆
形近紀岩梨ゝゝ猿ゝ　千那
幻住の手ゝゝ瓦ゝ夕の水　洒堂
郭ゝ明ゝ　幽水のゝくゝゝ　大江
ゝゝゝゝ小茶ゝ推ゝ　如行

紙帳とちらして
おもしろう安眠ふらけとゝろかり　野径
麦の穂をふりて
一笑こゝれや雨間のそらの青　之道
蓮の花迅速
ちらて咲ぬけしゝ咲ぬ　怪誹

俳諧集

大津寄香亭

いるこゝのうら枝眠る夜る　芭蕉
だらて係一孔雀の青　碧　寄香
うの方の新米祭に行ゝて　尚白
ゝよいゝこのこゝろひくゝ　自笑
松の木枯秋風さゝ入れしゝ　通雪

張弧弓光て琴の糸ゝ　松洞
うかれ出る女ふれて月の稜　香
夫敷ゝ流のゝ入る遠くさ　蕉
ゝる塚ゝ古々の文弧拾ふ　笑
物の業ゝる音かゝ　陶し　雪
ゝ雲ぬ光ゝ出て宮ゝ　冥蓮
信世の和ゝ情ゝ寺　白
あゝし吹ゝ雪ゝとゝる方二ゝ　洞
拔を拔ゝ蓬ゝ　の家　江山
稲妻に拜ゝ社拜ゝれて　蕉
撫ゝ女ゝ分の汗ゝ流ゝし　笑
義弧ゝて表現ハゝ穴の海ゝ　白
雨ゝ肥ゝる峯のゝ　香
美弦ゝ雲ゝ〇ゝ友ゝ人　雪

されたる高よりの弧の音や　山
その一大の遠よりつるれの枝　香
出ることをそなへ永のもしく　宮江
左んのうふこ典一れ那四れ墓　一龍
進られて庵のうを捨てり　蕉
中の秋暗涼あり弁紙代かう　雪
三線ちこく萩と踏あり　香
うきを人を暮てい儀る方時の　白
大雪雪つて拝したわれ女　香
一条や二条はうら赤猫うり　凋
雲のうを岩こ底此殿の山は　白
こんつしと雲ふ中うれて雪ふ　江
遠栗紙雲人て帰る時道　雪
酔必時い伯父の高さくうんちうく　香

紙の味ろる紙産ふ来る　龍
機さくひ毒戸ふ花の香を変て　蕉
ちれ夏うちちうの紅　白
俳諧集　色蕉
さ〜髪ぬく抜の下や弱くき
入日紙をくれ西宏の方　之道
あま桂の領うちつる林の来て　琢碩
前ちちくたりかつくれ栄　蕉
伊風ふ中の代のかくしと　道
麦のふうふ紙なくそそて　碩
秋をて一ひをうる縄ひた　蕉
顕はちる意鶯の紙　道
ヒ一織の年うるうい服ちて　碩
ス一ちを張の中る御屋を　蕉

山五本の竹の門うち初　嵐　道
かふと谷うり踊給ふり　碩
月就よ寒の芦毛馬遣うけて　蕉
綱もさてつも踏をうたて　道
をのくさも布子（十二枚）重ねる風　碩
ちとも孫生の子孫貧たおる　道
附しふ花もたにうめ新留　道
豆腐ろうしてそ雇うと文　碩

合歓の木の葉うしもいとこ星祭け
草の戸をまれや樹蔭に竜胆
相の木よ鶴鳴なる塚のうち
（長歌やうして）
おりしろう松をもえよ落葉数　土芳
　　卒山

笠田

病了の秋をたて義て結ねうか
蛍は花いふ滅老はつ作く秋
附子牛四の竹うち孫のうひ紅
木枯や頬うれいうむ人の角

智月亭

おれの角のうれしや志賀の雪
紅雪の雪ちうやちゆうう雪　智月
（紅花角のうまれ）
就角のうちうちうの角　其角
附ちこうや鼓のうれて角

猿蓑

ちうれ花も刷ひつううひ紅の角　去来

一次風の吹去りし後　芭蕉
股引の新うるほひ川越て　九兆
たぬき狸、怖を隙なのう　史邦
はつとしの若返る宵の方　蕉
人うゑられをるあの梨　来
書ふくろ書ふくろ秋れて　邦
そゝろこゝろもとれぬ袋　兆
行李も乏しのうちに移ぬり　来
里人そゝろあて年の見次　蕉
ほにまろの去年のねさめ　兆
茅蜩の花のとろりとして　邦
夜故はこれ出来されしをれ　蕉
三里あゆの道うくいろ　来
はきも盧同う男居るうて　邦

九十五

さゝ木つきの方の撥　兆
苦ふくろ花さかりふるまゝ水鮮　蕉
ひとり寝し今朝の腰元　来
ひとゝ死の二月ものも食て蛋　兆
雪まよ宮ゝ清の北風　邦
次ら角に蒙れ蒙る蒙る　来
ほとゝき夜ゝ蒙仕蒙ゝ　蕉
痩骨のまゝ紀まる力紀　邦
陰に試うて車引こむ　兆
うゝ人を振穀垣ゝぶら蒙　蕉
いまやゝ人の力ゝし出す　来
せいに付の振て敗ぬき　兆
れをひ切ゝる死紀ひゝ　邦
青天の有明方の新月ゝけ　来

湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
布子着ならふ風の夕暮　兆
押合て寝てハ又立かり枕　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　来
一かまへ鞦つくる窓のはな　兆
枇杷のふる葉に木の芽萌立　邦

俳諧集　園風

あらつきや雪をとれぬく藪宿
さよりは張る指のまさ掏　梅額
暦よむ人ふた里も安く居て　半残
かゝり牡丹の花がひらめけり　土芳
献しに宮をうつての上まゐる　良品
扇の角を法に奉すまひ　風麦

春はあへ蔚繕の鞘はさげ帯て　芭蕉
三川非鳴よ監の善　木白
馬の鞍ふゆくてまわる桜花　額
おこりと出た泥逆纏の熱　酡で
伊勢の海まられ素ふ濱を打ちぬ　麦
敵の肩ばれくる右ゝ　風
村人ハ寐の遠まで外りて　芳
錆江門徒ばなるとわりなる　品
造り出た今年の酒を耳口に　残
月もみな浴りのやすゞ兎はし　刀
蛛うりや溝よ穂蓼の生茂り　風
みくむ〆た庭れ芭蕉葉ふ　麦
そゝぎしの楽の衣裳を狂挽て　蕉
出しかけたる饅頭の汁　芳

このごろは涙とのほるも今時の　白
肩ふれぬる供のさゝゝひ　額
殘る雪男にゐんきゝん墨ゝつり　風
殺てたの沼を追　来る　麦
葬礼ふきゝる、馬の表ゝり　品
女嘆こゝる井のかゝのうち　芳
後朝の衣ぬるの餅と祝ゝて　蕉
脊中ハきゝくゝ抜ゝちける　白
きゝたゝる孫の中ゝなゝり　額
子成ひゝくゝる猿沢の鬼　刀
殺よゝんと皆〳〵烏帽子傾げて　白
ふゝゝこゝゝゝゝゝや殘ゝ　殘
七夕にゝ死とかゝたる涼ふゝき　風
家賣りて世ハあゝれふゝき　蕉

柿の木の枝もたゝ実を持て　麦
死てゝゝ酒ゝ名ゝ記まる　芳
修行者の踏ゝ入たる落ゝ　額
如斗の星殺ゝ沙ゝ　白
奪の瓜あゝり宝ゝ帰ぬ人　殘
松ハ一本山の秋〳〵　風
乞食ゝて死ゝ来たる蕉　蕉
雑子ゝ逃ゝ柿いるゝ　芳
春雨ハゝゝく解のゝく　刀
おもハぬ方の歌冬殺ゝ　麦
試ゝハ人を葬ゝ独ゝ　品
家主の来て発色ゝ同　白
引ゝつくゝやめ階ゝ　芳
国の墓ふゝてゝゝゝ　風

月代おもうこし　蕉
孫うらしをのいとかい　刀
壬生山家集
みをよりやゆふ斗の年の前　百歳
留の音こはる時の　式之
一ぢうひこ雁のまこ森る拍子　芭蕉
まいつゝに前し田面逆けし　夢牛
盃の名残あためん雪打　村鞍
脱押ぢうの紀雪の衣を　槐市
去殿の雁の中ゆ大ろひ　梅額
素良の小弧冥も高に下し　蕉
地灯をとはせといひ後雪　牛
紙衣羽織をとこ白ハせ　之
濁し残えより人を雪出て　百
夫

ふるを名深の嘉とゝ名ろ　額
有物の何ゝ酔を鮮とゝせ　市
茶ぢくらさる青山の　秋　村
ろかゝひの絡を作を寄せ名　蕉
瓶ろを源へく出を白糸　之
枝つをてのほれい坊ろ乳の坊　額
空あゝかをぢとめ怠ろ　百
ろれ来て猿に小唄殺せろ　村
雲の雁の屏風を畳く鹿狩を　額
面うけをおかをたる唐国斎　蕉
教ろのうう奇風を云ろく　牛
ろうしとゝ行をれをのるを　之
ひゝうる雀義ろ　村
紫雲の市ゝ酒買て　市

代日の後続の方も時たり　之
いふ妻こそ無ふらふ淋しき　村
奏ふけさいやそ長あの　百
ふとも考う待ふる長秋あるそひて　蕉
ちきけ花まうくうたる揀れ　之
打衣よ下ろの烏帽子就傾し　額
幕張志はれい皆けとる　蕉
雞のうたふもそれの盃あれや　之
相うん沒よるもる陽　市
邦基の射場やけんとう拵て　百
鞆よ注考るすそれ一ふさ　村
物の親

上市　至之

寸日八非就友事とーもれ　蕉

九九

書よ土民の供物物むる　示石
水える芦の蛇けいう雀鳴て　凡非
雪よ抜ふうる表揖の声　去来
ふううをふそふ方の旅人　景桃
秋よ突打る出食の　州
實入ふる長級の早稲の赤ふて　史邦
星迫くふる馬の足　蹟　玄哉
押うんて大ふふうう多く解　石
奉加よ出る僧の首　途　蕉
ちく川や罪屋の土ふふ　来
右もたし荊　咲々の　兆
波濯よやとれ歩け紛う業　州
描のいう又の声も恨めし　桃
上ハうそ下ハ志もうそ西見　蕉

皆白張のうちとはあるべからず　石
高葉へよ名所とうたふ方と云　好春
芝の浦辺の朝の淡　焼　邦
夏下り麻たゝぬ宮に降て　北
雨はろ〳〵と南ぬかるみ　来
米俵つゝみ村あらうり　桃
白鼠うゝへてし駕かゝ戻られ　蕉
うゝう後紅の表から九十支　哉
れさへうゝして発句　来
雨ふる宮よ後ふる鐘ちゝ　邦
蘇の星のおてく色し　桃
蛙鳴ゝうゝるつゝれの鳥鳴　石
野中よ於る舟の有たけ　春
万細く小雨よぬるゝ石地蔵　邦

百

世ハ炭り汐才芋焼て食ふ　北
萩ゝ子ふに蕎麦妻ふ家建て　蕉
あやの森ゝたふは山日の影　石
後しも小さ芋鞋ふ求めゝね　来
たゝこの形の風よ動ゝる　哉
芝の田ふ蕣表をえんも花咲り　桃
蕨よあゝる鶯の羽をひ　邦

元鮭もゝやの戸せゝ手内
糸を出てこ州ゝ新発
芝哉居て
人よ家哉ゝハせて我ハゝ
乙州ゝ糸ゝをまて
ちさとさへえよゝ橋やゝの雪　智力

百二丁